



Title	時空と認知の言語学(10) (冊子)
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/85197">https://hdl.handle.net/11094/85197</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2020

# 時空と認知の言語学X

井 元 秀 剛  
高 橋 克 欣  
瀧 田 恵 巳  
田 村 幸 誠  
春 木 仁 孝

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

言語文化共同研究プロジェクト2020

# 時空と認知の言語学X

井 元 秀 剛  
高 橋 克 欣  
瀧 田 恵 巳  
田 村 幸 誠  
春 木 仁 孝

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

言語文化共同研究プロジェクト2020

## 時空と認知の言語学 X

### 目 次

井 元 秀 剛	日本語従属節のテンス構造……………	1
高 橋 克 欣	談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム —談話的時制解釈の観点からの分析—……………	11
瀧 田 恵 巳	『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その4） ……	21
田 村 幸 誠	Cross-Indexing Viewからみた中央アラスカ・ユピック語の人 称接辞に関する一考察……………	31
春 木 仁 孝	フランス語における擬態語および関連表現について……………	41

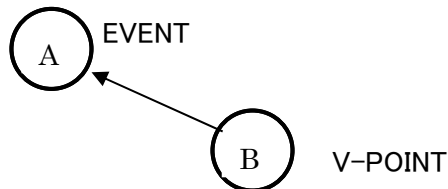
# 日本語従属節のテンス構造

## 井元秀剛

### 1. はじめに

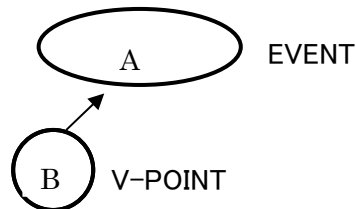
メンタルスペース理論による談話構成原理は、時制形式の流れについて、出現位置の文法的性質とは無関係に、ある一定の法則に従って使用されているという大胆な仮説である。筆者は Cutrer (1994)を嚆矢とするメンタルスペースの時制理論に依拠し、BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT という 4 つの基本スペースの組み合わせであらゆる時制形式の価値を表現できるという立場をとっている。日本語の時制形式であるル形とタ形について、井元 (2010)では次のように規定した<sup>1</sup>。

(1) タ形



(EVENT を時間的に前とするような位置に V-POINT が設定される)

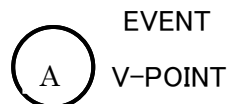
(2) ル形



(EVENT を時間的に同じか後とするような位置に V-POINT が設定される)

時間的に同じ場合、EVENT と V-POINT は同じスペースにあってもよい。従ってル形は

(3)



と書いてもよいことになる。

(3)はまた談話における初期値の構成であり、日本語の場合、ここからル形もしくはタ形の

<sup>1</sup> 終止形と連体形は区別せず、形容詞の終止形や連体形もル形に含めるし、「読んだ」のような撥音便もタ形に含める。また「そこに行くと、彼にあった」のようなト条件文の「行く」もル形であるし、「そこに行ったら、彼にあった」のようなタラ条件文における「行った」もタ形である。

使用によって V-POINT が移動し、言い切りの形で最後に移った V-POINT が BASE となる。FOCUS は基本的に EVENT の位置にあるが、タ形が完了の意味を帯びるとき、V-POINT の位置におかれることもある。図は上下の関係が作られていくスペースの順序を反映し、新しく作られるスペースは下に書かれる。また左右は時間関係を表し、左側が過去、右側が未来である。矢印は視点の向きを表す。

日本語のテンスマーカ―はル形とタ形しかなく<sup>2</sup>、これらは EVENT と V-POINT との関係のみによって規定されるものであるので、これらが使用され、(1)から(3)のどれかの形が構成された後、次の述定における EVENT の位置は次の 3 つのうちのどれかに限られる。

- (4) a. V-POINT の位置に移動する
- b. 同じ位置にとどまる
- c. 全く新しいスペースに移動する

本稿の目的は日本語の従属節内で用いられる時制は(4a)となるのが普通であり、(4bc)となるためには特殊な条件が必要であることを示すことである。なお、(4)は主節と従属節の関係のみならず、連続した時制のすべてにあてはまるものであるが、従来の議論は、従属節の後に主節が来る関係の中で、従属節の時制が問題にされてきた。本稿でも従属節の時制を中心に議論することになるが、その場合、(4a)は主節時基準、(4c)は発話時基準ということになるが、(4b)はどちらの場合もあり得る。従属節 P と主節 Q が同一スペースにある場合、P は相対テンスを用いることも絶対テンスを用いることも可能である。

- (5) a. 昨日テレビを観ているときに、隣室から異様な音が聞こえた。
- b. 昨日テレビを観ていたときに、隣室から異様な音が聞こえた。

(5)は同じ事態を(5a)では相対テンスを、(5b)では絶対テンスを用いて述べている。(5a)の場合、P の段階ではル形が(3)の段階でとどまっておき、Q の段階で V-POINT が移動して(1)の形を作り、その V-POINT が BASE と認定されるという形である。この場合も Q は P の V-POINT の位置に EVENT が来ており、相対テンスとなることから(4a)の特殊ケースであるとみなすべきだと思われるが、例外的な動きにみえるケースもあるため本稿では(4b)の中で論じることにする。

## 2. EVENT が V-POINT の位置に移動する場合

(4a)のケースであるが、このパターンが最も制約が少ない。典型的には「～した／～する時」のような時況節やタラ条件文のふるまいに見られる。

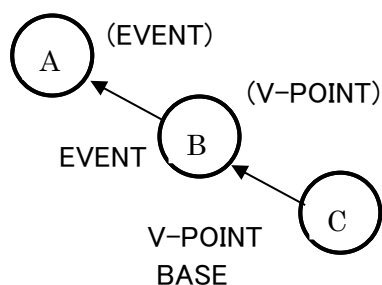
- (6) a. この鞆は日本に行ったとき、母が買ってくれました。
- b. この鞆は日本に行くとき、母が買ってくれました。
- c. 鞆は日本に行ったとき、母が買ってくれます。
- d. 鞆は日本に行くとき、母が買ってくれます。

<sup>2</sup> 本稿ではル形とタ形を一律にテンスマーカ―とみなす。従属節内で使用された場合など、相対テンスではなく、アスペクトを表しているにとることも可能であるが、筆者はアスペクトはテンス素性に FOCUS が関与することで生じる二次的な属性であると考えている。

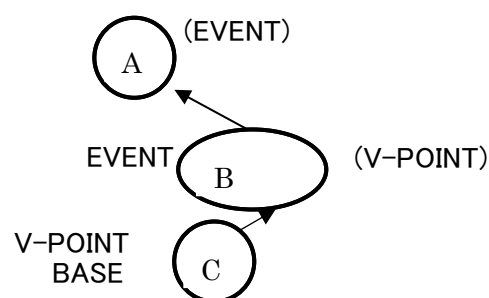
(6)のようにスルとシタのすべての組み合わせをあげてみると明らかであるが、従属節の「行く」と主節の「買う」の関係は、タ形を使った(6ac)では常に「行く」は「買う」より前(以下この関係を「行く<買う」のように表現する)であるし、ル形を使った(6bd)では常に「行く」は「買う」より後(この関係を以下「行く>買う」のように表現する)である。これらはすべて主節時基準の相対テンスであると筆者は考えているが、(6ad)は絶対テストのつもりで発したとしても同じ形になる。従って絶対テンスを用いる英語話者が(6a)を(6b)のつもりで用いたり、(6d)を(6c)のつもりで用いるという誤用は出現しやすい。実際(6a)のような発話を聞いて、日本でその鞆を買ったのかと思い、そう尋ねたところ、行く前に買ったのだと返答され、それなら(6b)のように言いなさいと訂正してあげたところ、過去のことなのになぜと問われて説明に窮したという話を耳にしたことがある。これらの関係をスペースを使って図示すると以下のようなになる。以下従属節のイベントを P、主節のイベントを Q とする。

(7) P シタ Q (P<Q)

a. P シタ Q シタ (P<Q<発話時)

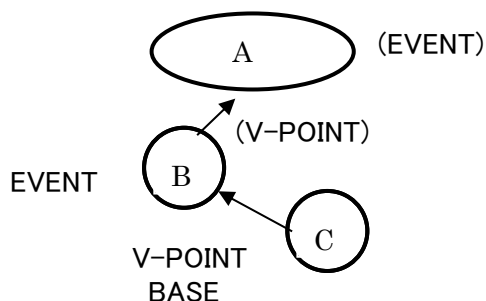


b. P シタ Q スル (P<Q ≧発話時)

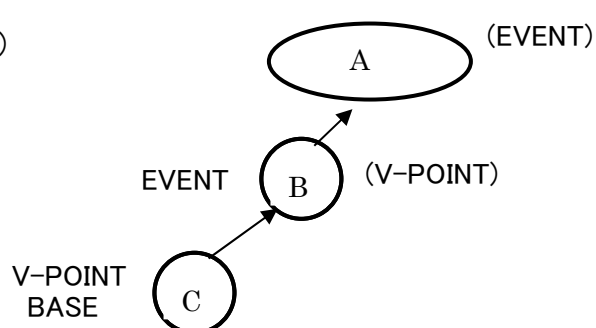


(8) P スル Q (P≧Q)

a. P スル Q シタ (P≧Q<発話時)



b. P スル Q スル (P≧Q ≧発話時)



(6ab)は(7ab)に、(6cd)は(8ab)に対応する。前件における P の段階では(7)は(1)、(8)は(2)が適用され、括弧付きで示したように A が EVENT で B が V-POINT となる。(4a)の動きは

この V-POINT の位置に EVENT が移動する、というもので、ここに主節の EVENT がおかれ、かっこ無しの構成ができあがる。C が最後に移った V-POINT の位置であるが、主節であり、ここで言い切りになるので BASE ということになる。FOCUS は省略したが、いずれの述定の場合も EVENT と重なるとみてよいであろう。このように前件の V-POINT は主節の EVENT の位置にあるので、主節時基準ということになるのである。

タラ条件文の場合は既定条件であろうと、仮定条件であろうと、前件 P がタ形で導入されているので、(6)の形しかあり得ない。

(9) a. この本を読んだら時制の仕組みが分かりました。

b. この本を読んだら時制の仕組みが分かります。

(9a)は(7a)に、(9b)は(7b)に対応するが、意味的に条件の事態は帰結の事態に先行するから、(7)の形以外はあり得ないのである。「P スル前 Q」「P シタ後 Q」の形も時間的前後関係を述べたものであり、その意味がそれぞれ  $P > Q$  と  $P < Q$  であるから、(7)と(8)の形に固定されている。

これらの固定した形に対し、「P スル/シタ時 Q」は例外的なふるまいをすることがある。

(10) 先月、ロシアに行った時は、シベリア鉄道を使った。 (工藤 2014: 227)

主節の「シベリア鉄道を使う」行為は従属節の「ロシアに行く」行為が完成する前だから、(8a)の形になるはずである、実際(8a)の形をとって

(11) 先月、ロシアへ行く時は、シベリア鉄道を使った。 (工藤 2014: 227)

としても同じ内容を表現できる。なぜ(10)の形が成立するのか、については後ほど述べる。

時間を表す副詞節や条件文の場合は P と Q の時間関係がかかわるので、その間に直接的な関係が成立するのは明らかであるが、単に指示対象を指定するために用いられる関係節の場合でも、(4a)の主節時基準となるのが普通である。

(12) a. 答案を書いた人は 3 号室に移った。

b. 答案を書く人は 3 号室に移った。

c. 答案を書いた人は 3 号室に移ってください。

d. 答案を書く人は 3 号室に移ってください。

(12ac)は既に書き終わった人であるから(7)であり、(12bd)はこれから書く人なので(8)である。答案を書いたのは既に過去のことなのだからと絶対テンスを用いて(12b)の内容を(12a)のように書くことは許されない。ただしこのような関係節の場合も例外的なふるまいをすることがある。

(13) 福井交通の運転手が[越前海岸で自殺した女性]をそこまで車に乗せて行った(らしい)。 (三原 1992:16)

(13)は従属節 P の「自殺した」は主節 Q の「車に乗せて行った」より明らかに後の出来事である。従って主節時基準なら(8a)のようになるはずであるが、タ形を使うことも可能である。このことから三原 (1992)は関係節と主節の時制に関して、「主節・関係節が同一形式を有する時、関係節時制形式は発話時を基準として成立する」という主張をする。確かに(12a)

のような場合も絶対テンスだと主張できないわけではないし、(13)のようなケースも捕捉できるからこの主張は妥当に見える。そもそも、主節がタ形の場合、従属節が相対テンスをとった場合も同じタ形になり、主節がル形の場合、従属節が相対テンスの場合でも同じル形になる。しかしながら(12)では主節の時制にかかわらず、「書いた人」と「書く人」の間に明らかな意味の違いがあり、主節時との関係が同じように成立するので、(12ad)も相対テンスだとみなすのが妥当であろう。もし三原の主張通りなら、発話時に答案を書き終わっていた場合、(12b)の意味で(12a)を用いることができるし、発話時にまだ答案を書いていなければ、(12c)の意味で(12d)を用いてもよいことになってしまう。(13)についても三原自身が「らしい」を補っているように「乗せていった」だけではなんとなく座りが悪い。相対テンスを使って

- (14) 福井交通の運転手が[越前海岸で自殺することになる女性]をそこまで車に乗せて行った(らしい)。

とすると「らしい」がなくても問題ないだろう。このことから関係節の場合も主節時基準の相対テンスが原則であり、(13)のような形は例外的なものであるとみなすべきであると思われる。なぜ(13)が成立するのか、については後ほど考えてみたい。

未来の事柄であるが、それを完了した状態で想定するような場合、一見すると(7)にあてはまらないように思える文も存在する。

- (15) 花子のために無理して絹のドレスを買った。彼女がこれを着た姿を想像すると胸が熱くなった。

(15)の「着た」は結果状態のアスペクトを表しており、現実の時間とは無関係に、想像の世界では「着る」という形で EVENT である A を完了した状態で見ている V-POINT の B に「想像する」の EVENT が置かれる構造である。A は想像の中の産物であって、対応する現実世界が B よりあとであっても、想像の世界の中では過去であっても構わないのである。従って(7b)が当てはまる。仮に(15)の「着た」に副詞が加わり「これを明日着た姿」としても同じである。同様のことは以下の各文にも当てはまる。

- (16) [彼が政権から去った] あとが心配だ。 橋本 (1997:49)  
(17) 犯人はアリバイ工作のため、[2月19日は金沢に行ったと] 隣人に思い込ませようとした。 三原 (1992:31)  
(18) 先ほどの議論では [明日の戦闘で敵がノルマンディに上陸したと] あらかじめ想定してみた。しかし明日本当に上陸してくるかどうかは分からない。

橋本 (1996:32)

このうち(17)は主節の「思い込ませようとした」は2月19日以前の読みを問題にしている。また(18)は二文目を付け加えることによって「上陸した」が発話時基準としても当てはまらないことを示している。ただ、いずれの場合も[ ]内のできごとは現実スペースではなく、主節時に思い描いているメンタルスペース内部のできごとである。(18)で「明日」という限定と「上陸した」のタ形が共起しているのもこれが仮定スペースだからに他ならない。この

ような仮定スペースの中では主節時に P が既に完了済みの状態として存在していると考え  
るべきであり、P を完了済みのものと見ている V-POINT に主節の EVENT が置かれている  
と言えるのである。P が対応する現実の P'は P'>Q ではあってもメンタルスペース内の P は  
常に P<Q であって(7)が成立すると筆者は考えている。

(19) あの男の〔日本に来る〕まえの経歴を調べてみた。 橋本 (1997:51)

これも類例として処理できる。「日本に来る」は想定スペース内の出来事ではないが、問題  
になっているのは経歴である。P を未来として見る V-POINT に経歴として存在している対  
象を「調べてみた」のであり、P の V-POINT と Q の EVENT は重なるのである。

### 3. EVENT が同じスペースにとどまる場合

(4b)のケースであるが、従属節と主節が同一スペースと解釈できるときにはこれが可能で  
ある。EVENT に限らず、基本スペースの位置が変わらないというのは、談話構成原理のも  
っとも基本的なありようであり、文をまたがった場合でも絶対テンスを使った表現として  
可能な構成である。

(20) 昨日大学で言語学の授業を受けた。とても面白かった。

第 1 文の大学で授業を受けたスペースと、第 2 文のそれを面白いと判断したスペースは  
同じと解釈するのが自然である。同一のスペースで生じた事態をともに BASE を視点とし  
て描写しているのである。しかしながら従属節と主節という形で述定が連続する場合、述定  
される事態の間で何らかの関係が生じるのが普通で、V-POINT の位置に EVENT が移動し  
て、前後関係を明示することになるのが普通である。そうではなく、あえて EVENT が同  
じ位置にとどまり、しかも絶対テンスで表現されるためには、ル形やタ形が備えるアスペク  
ト的価値を捨象し、あえて同一スペースであると解釈できなくてはならないという条件が  
必要になるのである。相対テンスで表現してもよさそうなのに、そうならないケースの  
大半は、全体としてイベントを見た場合に同一スペースの出来事とみなせるといこのケ  
ースのものである。(10)の例が典型的で、ロシアへ行くという行為を全体としてひとまと  
まりのものと見なしており、「行く」行為と「シベリア鉄道を使う」行為の前後関係を問題に  
していない。

(21) 先月、ロシアに行った時は、往復ともシベリア鉄道を使いました。

工藤 (2014:227)

(21)では復路も含めて「ロシアへ行った」と同時性で把握されているので、この場合は絶対  
テンスを使用したタ形しか用いることはできない。ル形があてはまるのは往路だけであっ  
て復路は当てはまらないからである。

時間関係を表す副詞節のうち、「P スル前 Q」と「P シタ後 Q」は前述したように P と Q  
の前後関係を表現するためのものであり、形式的に同一スペース解釈はできず、相対テンス  
にならざるを得ないが、「P{スル/シタ}時 Q」の場合、同時性を表すのが本義であるから(10)  
や(21)のような絶対テンスの使用が常に可能であるはずなのだが、実際には(6)のように相  
対テンスの方が普通である。手紙をコンビニに行く途中で投函したという状況では

- (22) a. 手紙は先ほどコンビニに行くとき、出しておきました。  
b. 手紙は先ほどコンビニに行ったとき、出しておきました。

のどちらも可能だろう。わざわざ動作の完了前ということを示しなくても、全体的同時性としての把握が可能だからである。(6)の場合も、20年前のできごととして

(23) このスーツケースは20年前、フランスに行ったときに買ったものです。  
とすると、行く前に買った場合でも可能かもしれない。フランス旅行のために買ったのであって、全体的同時性と把握することが可能になるからである。

テイル形や形容詞述語もしくはイル・アルのように状態を表す場合、ル形タ形ともにアスペクト的差異が捨象されるので、同一スペース解釈が容易にできる。そのため(5)のようにどちらを用いても差が無い文ができる。

- (24) a. 私も若いときはよく山に登りました。  
b. 私も若かったときはよく山に登りました。  
(25) a. その店はフランスにいるとき、よく行っていました。  
b. その店はフランスにいたとき、よく行っていました。

過去における同一スペース解釈は(24)(25)のように、相対テンスを用いた「ル形・タ形」の形も絶対テンスを用いた「タ形・タ形」の形も原則として可能であるが、Pがル形の形しか許容されないものもある。ト条件文がそうであり、「P スルト Q」の型に固定され、「\*P シタト Q」とは言えない。ト条件文はタラ条件文でも同じ内容を表現できることが多い。

- (26) a. 教室に行くと太郎が来ていた。  
b. 教室に行ったら太郎が来ていた。

同じ事態であるが、(26a)はPQを同じスペースとして、(26b)は異なったスペースとして捉えている。同一スペース解釈が難しい内容であれば、ト条件文は用いることができない<sup>3</sup>。

- (27) \*家で寝ていると、伊豆で地震が起こった。 蓮沼 (1993:77)

(27)は「家で寝ていたら」というタラ条件文に変えると問題ないだろう。

「～スル型」「～スル事態」「～スル計画」「～スル予定」のように、しばしば「～スル(トイウ)N」のようなトイウを挟むことが可能な名詞句を構成する場合もル形のみである。

- (28) 左足から踏み込んで左前まわしを取る型を確立した。 丹羽 (2013:267)  
(29) アメリカに留学する計画が実現した。 丹羽 (1997:59)

これらは完成相のアスペクトとして行為の全体をNとして把握しているわけで、そのように把握することの可能な位置で主節のイベントが記録される恒常スペースからの転送で、同一スペースのル形としての把握であると考えることができる。丹羽 (1997)は(29)について、これらの基準時を発話時と考えても主節時と考えてもつじつまがあわず、「計画」が思い描かれた時点を基準にしてそれ以降を表していると言っているが、計画は計画を実現しているときも計画として把握される状態にあるのであるから同一スペースとみなすべきであ

<sup>3</sup> (27)は蓮沼の判定だが、人によっては許容することもあるかもしれない。スペースの取り方には可変性があり、何らかの形で同一スペースとの解釈ができればよいのである。

る。「リンゴを食べた」という場合、食べ終わった瞬間にリンゴは消失するが、「食べる」の EVENT にリンゴが存在していないということはできないのである。

ル形がステージレベルで単一のイベントを表すのではなく、恒常的な状態として表現される場合も完成相アスペクトとしてのル形による同一スペース解釈が可能である。

(30) 母の作るおはぎはいつもおいしかった。 (三原 (1992:23))

三原も指摘するように、この「作る」は習慣的動作を表しておりいわば汎時間的指示であり、「おいしい」という状況と同一スペースの中で生じているという解釈が可能なのである。ただし、この場合完了アスペクトとしての把握も可能で、

(31) 母の作ったおはぎはいつもおいしかった。

と表現することも可能である。これは同一スペースによる絶対テンスの使用というより、相対テンスである(7a)の形であると筆者はみなしたい。

予定を表す場合、「～スル予定」と明示された場合は前述したようにル形しか可能ではないが、動詞句のみで表現された場合、ル形もタ形も可能である。ただし、ル形はそのような予定があるという状態を表すので、予定の内容の前後とは無関係に同時とみなすことができる。

(32) 今日は会議があるから{早く帰る／帰りが遅くなる}

(32)は会議の時間と帰宅する予定の時間との前後関係は問題にならない。いつも6時に帰る発話者が5時にオンラインでの会議があるので、自宅から出席するために4時に帰宅する(「早く帰る」)を意図する場合でも、会議に出たあとで7時に帰宅する(「帰りが遅くなる」)を意図する場合でも「会議がある」のル形を使用できる。これは予定の言明であり、予定は(32)のように「会議がある」「約束がある」のように状態動詞「ある」を用いて表現することが多いように、基本的に状態を表現するものである。もはや予定として機能しなくなった場合、「明日は6時から会議があったのだが、行かない」のように未来のことがらでも過去形で表現できるようにその予定を保持している状態と理解するべきものである。予定の内容が動作動詞で表現されている場合もこれに準じ、(32)の「会議がある」を「テレビを観る」に変えても同じだろう。ただし動作動詞の場合予定と理解されるのはル形のみであって、「会議があったのだが」と未来の予定を否定できても、「会議に出たのだが」は条件文以外の解釈ではキャンセルした予定の意味で用いることはできない。(32)の主節を過去にする

- (33) a. その日は会議があるから早く帰った。  
b. その日は会議があったから早く帰った。  
c. ??その日は会議があるから帰りが遅くなった。  
d. その日は会議があったから帰りが遅くなった。

(33ab)では会議は予定であり、そのような予定があるという状態と「早く帰った」という動作が同一スペースにあり、相対テンスのル形も絶対テンスのタ形も使用できる。(33b)で「タ形・タ形」の組み合わせでありながら(7a)にならないのは、同一スペースであるからである。

「会議に出た」のように動作動詞のタ形だと予定にならないので、(33b)の意味では用いることができない。(33cd)の状況では会議は予定ではなく、過去の事実になっているので、(33c)では表現できず、(33d)のように(7a)の形にならなくてはならない。

次の例も予定の一種である。

(34) 次に来るバスに乗ってください。 丹羽 (2013:264)

この「来る」は予定であるが、現在の状態を表しており、この時点ですでに存在しているバスを指定する機能をもっている。予定の EVENT は予定そのものの実現スペースではなく予定として存在しているスペースであるということの具体的な事例にもなっている。主節はそのバスに乗りなさいという予定の命令であり、「来る」も「乗る」も同一スペースであるとみなせるのである。

#### 4. EVENT が全く新しいスペースに移動する場合

P と Q が独立している場合、全く新しいスペースに Q の EVENT が設定されることがある。「ここは今はさびれているが、10年前はとても賑わっていた」のように等位接続の文や独立した2文の間では珍しくないが、従位接続の場合は例外的である。P が独立しているということで P の V-POINT が BASE でなくてはならないが、同時以外の関係で結ばれる時、そこに前後の関係が必然的に問題とする構造になりがちだからである。例外が生じるのは関係節の場合である。(13)が典型的な例であるが、このような例を見つけることはさして難しくはない。

(35) 10年前、去年庶務課にいた田中と初めて知り合ったんだ。

(35)は10年前スペースと去年スペースが作られており、従属節 P の EVENT は去年スペース、主節 Q の EVENT は10年前スペースである。この2つのスペースを同一とみなすことはまず無理だろう。タ形・タ形の組み合わせだから、本来(7a)のように  $P < Q$  となるはずなのに、 $P > Q$  となっている。

これは指示対象を指定するための名詞句の指示のあり方と関わっている。

(36) 2015年、首相は野党と密室の合意にこぎつけた。

(36)の首相はデフォルトでは2015年当時の阿部首相を指すと思われるが、発話時の管首相を指すことも可能である。当時は官房長官であって首相ではなかったが、アクセス原理によって親スペースである現在の属性によって指定された対象とアイデンティティーコネクタで結ばれた FOCUS スペースの要素が指定対象となっているのである。これはメンタルスペース理論ではよく知られた現象である。(35)は「去年」という BASE を基準にした副詞の使用があるからこのアクセス原理による解釈が優勢になるが、この副詞がないと

(37) a. 10年前、庶務課にいた田中と初めて知り合ったんだ。

b. 10年前、庶務課にいる田中と初めて知り合ったんだ。

(37)はどちらも同一スペース解釈で、10年前スペースで当時田中が庶務課にいたという読みが普通だろう。(37a)が相対テンス、(37b)が絶対テンスの使用だが、意味は同じである。これ以外に、(37a)はそれ以前に庶務課にいたという相対テンス解釈や、(35)のような現在以

前 10 年前以降というアクセス原理解釈も可能であるし、(37b)も現在庶務課にいるというアクセス原理解釈も可能である。しかし、どちらの場合もアクセス原理解釈は親スペースの属性が認知的に突出した最もアクセスしやすい情報であるという条件が必要であり、例外的なふるまいであるといつてよいと思う。(13)も「越前海岸で自殺した」という属性がその女性を指示するのに最もアクセスしやすい情報であったために使われたのである。

## 5. 結論

以上の考察から、日本語の従属節のテンスは主節時を基準とした相対テンスを用いるのがもっとも制約が少なく、(7)(8)が基本の構造であることがわかる。これは P と Q が R 形とタ形の組み合わせで提示されたときに括弧で示した時間関係を示すと同時に、括弧でしめされた時間関係を意味する場合、対応した形式になるという双方向の図式であることを意味する。ただし、P と Q が同一スペースのイベントであると認識することが可能な場合、P が絶対テンスをとることも可能で、一見すると(7)(8)の例外に見えるケースの大部分はこの同一スペース解釈によるものである。これ以外に関係節の中の時制がアクセス原理によって親スペースから指定されることもあるが、これらすべては日本語の談話構成原理に則った動きである。

ただし、「～シタ 1 年前」のような表現があり、筆者の現在の図式では説明できない。

(38) a. 君が見た一年も前に、私はその映画をアメリカで見た。 橋本 (1997:50)

b. 大金をかけて新しい製品を開発しても、完成した 1 年も前に他社がもっとすごい製品を売り出しているかもしれない。

このタ形・タ形は同じスペースとは考えられないにもかかわらず、 $P > Q$  であり、かつ P は絶対テンスでもない。このケースについてはまた稿を改めて論じてみたい。

## 参考文献

- Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language*. Ph.D.thesis, University of California San Diego.
- 橋本修 (1996) 「引用節の基準時」『文藝言語研究 言語篇 (筑波大学文藝・言語学系)』 29, 25-39.
- 橋本修 (1997) 「マエ・アト節のトキ解釈」『文藝言語研究 言語篇 (筑波大学文藝・言語学系)』 32.
- 井元秀剛 (2010) 『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』 ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』 くろしお出版.
- 丹羽哲也 (1997) 「連体節のテンスについて」『人文研究 (大阪市立大学文学部)』 49-5, 29-64.
- 丹羽哲也 (2013) 「連体修飾節における基本形とタ形の対立」『形式語研究論集』 和泉書院, 263-283.

# 談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム —談話的時制解釈の観点からの分析—

高橋克欣

## 1. はじめに

筆者は高橋(2016)において、一般的に容認度が低いといわれている *quand* 節の中に半過去が現れる用例の解釈メカニズムを統一的な形で説明することを試みたが、その中でじゅうぶんに論じられなかった問題もいくつか残されている。そこで本稿では、高橋(2014, 2016)で提唱した談話的時制解釈の枠組みを用いて、*quand* 節および *comme* 節において用いられる直説法半過去の解釈メカニズムに関する統一的な説明を行うことを目指す<sup>1</sup>。本稿では *quand* 節および *comme* 節において用いられる直説法半過去が関与する現象を網羅的に扱うことはできないため、具体例の分析を通じて問題の所在を明らかにし、今後のより包括的な研究のための手がかりとしたい。

本稿ではまず、半過去全般に当てはまると考えられる解釈メカニズムについて説明したあとに、一般に主節との同時性を表す時況節であると考えられている *quand* 節と *comme* 節の特徴を確認したうえで、それぞれの時況節の機能と半過去との関係について談話的時制解釈の観点から論じる。

## 2. 談話的時制解釈の観点による半過去の解釈メカニズム

時況節の中で用いられる半過去について考察する前に、まずは半過去全般に適用されるべき半過去の解釈メカニズムを確認する。

筆者は高橋(2016: 66)において、半過去によって表される事態が談話の中でどのような形で定位を受けるかを説明するために「係留」という概念を用い、その機序に関して次のような仮説を提示した。

### (1) 半過去の係留操作

半過去は過去時制であり、談話時空間内の過去に位置づけられる事態を表す。時間軸上に直接事態を位置づける「投錨」とは異なり、半過去による「係留」は相対的な操作である。半過去が安定した解釈を受けるためには、半過去によって表される事態を部分的な要素として含み持つ全体としての認識枠が解釈上設定される必要がある。(以下略)

このような解釈メカニズムを措定するのは、半過去が「非自立性」という意味的特性を持つためである。半過去の非自立性については、研究者により捉え方が多少異なる部分もある

---

<sup>1</sup> 本稿では直説法半過去のみを取り扱い、接続法半過去は考察の対象としないため、以後は直説法半過去を指し示すために「半過去」という語を用いる。

が、共通しているのは、半過去を単独で用いると解釈が不安定になるため、過去の時点を表す副詞句や他の自立的な過去時制とともに用いる必要があるという点である。

(2) *Hier à huit heures, Marie buvait un café.* (Sthioul 1998 : 207)

(3) *Paul entra. Marie buvait un café.* (*ibid.*)

(2) の文頭に置かれた状況補語や (3) で半過去が現れる前の文で用いられた単純過去は、半過去の解釈を安定させるための「支え」としてのはたらきを担っていると考えることができる。

主節に現れる半過去については、このような形の説明を行うことが可能であるといえるが、*quand* 節において用いられる半過去の解釈について、半過去が容認される場合と容認されない場合のちがいを統一的な形で説明するためには、文単位の解釈をこえた談話単位の解釈を考慮した「係留」という概念が必要となる。

半過去による「係留」の操作は単一のものではなく、「係留」が実現されるための方法にはいくつかの場合が考えられる。

典型的なのは、上の(3)のような教科書的な例が示す、完了相を表す他の自立的な過去時制によって半過去の解釈が支えられる場合である。

あるいは、次の(4)のように、主節で半過去が用いられ、*quand* 節で複合過去や単純過去が用いられる場合にも、同じような形で半過去の解釈が成立すると考えられている。

(4) *Quand nous sommes arrivés dans le salon, M. et Mme Moucheboume étaient là (...)*

(Jean-Jacques Sempé et René Goscinny, *Le petit Nicolas a des ennuis*)

もちろん、常に自立的な過去時制が半過去に先立って用いられるとは限らず、特に物語の冒頭において半過去によって物語が開始されることは決して珍しいことではない。

(5) *Un ciel pur comme de l'eau baignait les étoiles et les révélait. Puis c'était la nuit. Le Sahara se déployait dune par dune sous la lune.* (Antoine Saint-Exupéry, *Courrier sud*)

このような半過去の解釈メカニズムを適切な形で説明するためには、談話の構築過程を考慮することが欠かせない。つまり、このような半過去は、物語の冒頭に現れているということが読み手には明らかであるからこそ解釈が可能なのである。東郷(2011 : 94)は談話の冒頭に現れる半過去の解釈について、次のように述べている。

(6) 話し手(書き手)は頭の中にこれから語ろうとする物語を持っています。最初の出来事が起きる時点を  $t_1$  とします。すると物語の冒頭の場面における視点は  $t_1$  にセットされ、 $t_1$  に

おける事態を半過去で語ることができます。(中略) これはいわば視点の先取りで、聞き手(読み手)をいきなり物語に引き込んで、次に起きる出来事を期待させる効果があります。

このように、半過去を用いて物語を開始することで読み手の期待を高める効果が生じるのも、半過去が「非自立性」という意味的特徴を持っており、半過去だけで語りが完成することはないからである。この場合、物語の冒頭において用いられる半過去が「係留」するのは、後に現れ、完了相を表す他の過去時制ではなく、視点がセットされる物語の時空間ということになる。

いずれにせよ、半過去は、それが実際に用いられる文脈において、談話解釈領域内の何らかの要素との間に関係性を築くことで安定的な解釈を得ることができる、というのが半過去全般に共通する解釈メカニズムである。

また、ここでもうひとつ重要なことは、(3)や(4)のように半過去が他の過去時制とともに用いられる場合、半過去によって表される事態と他の過去時制によって表される事態との間には、一般的に時間的同时性の関係が成立する、という点である<sup>2</sup>。

このように、半過去自体が「同時性」という意味的特性を持っていることから、主節との同時性を表す時況節と半過去との関係は整合的であると考えられそうであるが、必ずしもそうであるとはいいきれないことに注意する必要がある。そこで次節では、主節との同時性を表す時況節について概観する。

### 3. 主節との同時性を表す時況節

フランス語において主節との同時性を表す時況節には、次のようなものがある<sup>3</sup>。

quand, lorsque, dès que, aussitôt que, chaque fois que, toutes les fois que, à mesure que, au fur et à mesure que, pendant que, tandis que, alors que, au moment où, tant que, aussi longtemps que, depuis que

これらの時況節はいずれも、時況節によって表される事態と主節によって表される事態との時間的關係が「同時性 (simultanéité)」であるという共通性があるとはいえ、その「同時性」の概念自体がまったく同一であるわけではないため、どれも互いに置換可能であるとは考えられず、それぞれの時況節に固有の意味的・統語的特徴がある。そして、これらの時況節は語りの展開に合わせて語りの時空間内に種々の事態を適切に配置する役割を果たしている。

興味深いのは、これらの中で **quand** 節と **comme** 節はどちらも主節に対する時間的同时性

---

<sup>2</sup> ただし、この時間的同时性は半過去の解釈において常に成立するものではなく、そのため「同時性」を半過去の本質とは考えない研究者もいる。

<sup>3</sup> Poisson-Quinton, Mimran et Mahéo-Le Coadic (2008 : 277-282) から引用した。

を表すという意味的特性を持ちながら、いくつかの観点から互いに対照的な特徴を持っているという点である。そのような特徴が際立つのは、これらの時況節で半過去を用いる場合であり、次節以降では半過去の解釈メカニズムとこれらの時況節の談話上ではたらしに着目し、具体例の考察を通じて、半過去、*quand* 節、そして *comme* 節それぞれの特質に関する理解をさらに深めるための手がかりを明らかにしたい。

#### 4. *quand* 節と半過去

よく知られているように、先行研究では *quand* 節の中で半過去が用いられることはまれであるとされている。先に述べたように、半過去が「同時性」という意味的特性を有していることを考えれば、このことは意外なことであるように思われる。

高橋(2016)において論じたことであるが、*quand* 節における半過去のふるまいを文単位で考察し、容認度の判断を行った結果を見ると、*quand* 節には半過去に対する使用制約が存在するということが誤りであるとはいえない。

しかしながら、高橋(2016)において談話的時制解釈の観点から具体例の分析を示したように、文学作品などにおいてそのような例が見出されることは「まれ」といえるほどに例外的なことではない。つまり、*quand* 節および半過去のはたらしを見極めるためには、談話単位での観察と考察が欠かせないということである。

これは、先行研究において、例外的に用いられることがあると説明されている例についても同様である。たとえば、朝倉(2005:439)では、*quand* 節の中で用いられる半過去について「*être* と年齢の表現 *avoir... ans* のほかはまれ」と述べている。この記述自体は誤りであるとはいえないが、このような例文の解釈メカニズムをより深く理解するためには、*quand* 節において *être* の半過去が用いられている例が現れる文脈に着目する必要がある。

(7) *Laure la regardait sans comprendre. Jeanne pelait une pêche et paraissait réfléchir. Elle goûta un morceau et tendit le fruit à son amie.*

- *J'en ai déjà mangé deux quand tu étais au téléphone.* (Anne Wiazemsky, *L'île*)

ここではたしかに *quand* 節の中で *être* の半過去が用いられているが、この *quand* 節が表している「あなたが電話していたとき」については、この場面よりも前の段階でまとまった分量の具体的な描写がなされており、聞き手(読み手)は、この台詞を耳にした(目にした)ときに、この *quand* 節がいつのことであるのかを特定することが可能であるからこそ、この *quand* 節が解釈可能となるのである。

この例文において、主節の事態と *quand* 節の事態とは時間的に同時に生じていると解釈することができるが、それは *quand* 節において同時性という意味的特性を持つ半過去が用

いられたことによって生じたものであるといえる<sup>4</sup>.

## 5. comme 節と半過去

一方、時況節として用いられる *comme* 節には次のような特徴があることが知られている (朝倉 2005 : 417-419).

- (a) <*comme*+時況節>の動詞は、例外を除けば半過去に限られる。
- (b) *comme* は時況節の継続動作と主節の瞬間的動作とを対立させる。
- (c) <*comme*+時況節>はいつも肯定である<sup>5</sup>。

(a)は、*quand* 節において半過去に対する使用制約が存在することを考え合わせると、*quand* 節とは対照的な特徴であるといえる。(b)については後ほど詳しく論じるが、この点が *quand* 節とは異なる、時況節としての *comme* 節に固有の機能であると考えられる。

*comme* 節が前置される場合には時況節であるかあるいは原因節であるかの判断が難しいこともあるが、次の例は時況節として解釈される例である。

(8) Un jour, *comme* je tapotais pitoyablement sur la machine, je levai les yeux et je vis ma supérieur qui m'observait avec consternation. (Amélie Nothomb, *Stupeur et tremblements*)

ここでは文頭に Un jour 「ある日」という時況表現が置かれていることから明らかなように、この場面は、談話上これ以前にすでに登場した場面を受ける形で述べられたものとは解釈されず、このような場合には *comme* が用いられるのが自然であると考えられる。

## 6. 談話の解釈と時況節のはたらき

前節までに見たように、*quand* 節も *comme* 節も、主節との時間的同時性を表すという意味では同等の機能を持つ時況節とみなすことができるように思われるかもしれないが、それはあくまでも結果的にそのような意味効果が生じるということであり、談話における両者の基本的な機能は異なるものであると考える必要がある。以下では、両者の基本的な機能を談話的時制解釈の観点から考察する。

まずは *quand* 節の基本的な機能であるが、これは、主節によって表される事態を時間的な

---

<sup>4</sup> *quand* 節の中で半過去以外の時制が用いられると、*quand* 節は厳密な意味での主節との同時性を表さず、継起性などを表すこともある。

<sup>5</sup> *comme* 節の中で半過去の否定形が用いられる場合には、原因節として解釈される。

たとえば、*Comme il n'y avait rien à manger dans la maison, Papa nous a emmenés en taxi au restaurant.* (Sempé-Gosciny, *Le petit Nicolas a des ennuis*) は「家に食べるものが何もなかったので (後略)」となる。

意味で談話時空間内に定位するために、場面を設定または特定することである<sup>6</sup>。主節によって表される事態がいつどのような場面で生じたのかを明示するために、*quand* 節では談話時空間内の特定の場面に言及するのである。

そのためには、*quand* 節によって表される事態が、主節とは独立した形で解釈可能である必要がある。もしも主節に依存する形でなければ *quand* 節が解釈できないということになると、*quand* 節は談話上でその機能を果たすことができず、そのような文は容認されないことになる。

*quand* 節の中で複合過去や単純過去などの完了相を表す過去時制が用いられることが多いのは、これらが単独で用いられても安定的な解釈が得られる自立的な過去時制であるためである<sup>7</sup>。

(9) *Quand je suis arrivé à la maison, ma mère commençait à préparer le repas.*

(Hubert Mingarelli, *La dernière neige*)

(9) では、*quand* 節の複合過去によって「私が帰宅した」場面が明示され、その場面において「母親が食事の準備を始めようとしていた」ことが主節の半過去によって示される。これを主節の半過去の側から見ると、この半過去の解釈において「係留」先となるのが *quand* 節によって表される事態ということになる。

一方、*quand* 節の中で半過去を用いる場合には、主節の事態とは独立した形で、半過去の解釈が成立する必要がある。このことを談話的時制解釈の観点から説明するならば、半過去の「係留」先が主節の事態であってはならないということになるが、このような解釈が可能となるためにはいくつかの方法が考えられる。

先ほど見た(7)の例では、*quand* 節の半過去の「係留」先は、この場面に先行する文脈上の一場面ということになる。

(7) *Laure la regardait sans comprendre. Jeanne pelait une pêche et paraissait réfléchir. Elle goûta un morceau et tendit le fruit à son amie.*

- *J'en ai déjà mangé deux quand tu étais au téléphone.*

(Anne Wiazemsky, *L'île*)

また、朝倉(2005)における「年齢の表現 *avoir... ans*」の場合には、我々がこの世界について共通して認識している百科事典的知識を参照することによって *quand* 節の半過去の解釈

---

<sup>6</sup> 「場面の設定」と「場面の特定」のちがいは、主節に対する *quand* 節の位置関係におおむね対応するものと考えられるが、詳細な考察が必要であるため本稿では詳しく論じない。

<sup>7</sup> 高橋(2016)では、複合過去や単純過去などの自立的な過去時制による事態の定位操作を「投錨」と呼び、非自立的な過去時制である半過去による定位操作である「係留」と区別した。

が可能となり、このような半過去の「係留」先は共有知識の一部である「人間の一生」の概念であると考えられる。

これに類するものとして、次のような例の *être* の半過去の解釈も同様の形で考えることができる。

(10) Il s'appelait Henri, il est mort de maladie il y a très longtemps, quand Corinne *était* encore un bébé.

(Jean-Marie Gustave Le Clézio, *Printemps et autre saisons*)

この例では, *quand* 節によって表される事態である「コリンヌがまだ赤ちゃんだったとき」についての描写が先行文脈において具体的に示されているわけではない。しかし我々は百科事典的知識により, 人間にはみな赤ちゃんだったときが存在することを知っており, 言語文脈によらずともこの文を解釈することに困難は生じない。この例の半過去の「係留」先も, 共有知識の一部である「人間の一生」の概念であると考えることができる。

このように, *quand* 節において半過去が用いられる事例を観察すると, 半過去を解釈するためには主節以外の何らかの要素を参照する必要がある, それらは先行文脈や共有知識といった談話における解釈資源であることが分かる。

*quand* 節がこのような特徴を持つものに対して, *comme* 節の基本的な機能はもっぱら主節の事態と *comme* 節の事態との間に意味的な関係が成立することを示すことにあると考えることができる。 *comme* 節の事態と主節の事態との間に成立する関係は, 時間的同時性の場合もあれば原因と結果という因果関係の場合もある<sup>8</sup>。

*quand* 節とは異なり, 主節によって表される事態を時間的な意味で談話時空間内に定位するために場面を設定したり特定したりすることは *comme* の基本的な機能ではなく, *comme* 節によって表される事態は, むしろ *quand* 節の場合とは対照的に, 主節と関連づけられた形で解釈される必要がある。これを談話的時制解釈の観点から述べると, *comme* 節において半過去が用いられる場合には, その半過去の「係留」先が主節の事態である必要がある, *comme* 節は半過去の「係留」先として主節の事態を指定する機能を持つ時況節であるということになる。

先ほど示した(8)の例においても, *comme* 節の半過去は先行文脈や共有知識とは関係なく, 後続する主節の事態と関連づけられ, 主節の事態との時間的同時性を表すものとして解釈されるのである。

(8) Un jour, *comme* je tapotais pitoyablement sur la machine, je levai les yeux et je vis ma supérieur

---

<sup>8</sup> ただし, 本稿で問題にしているのは *comme* 節で半過去が用いられる例であるため, *comme* 節が原因節として解釈される場合であっても基本的には *comme* 節と主節の事態の間には時間的同時性の関係も成立している。

qui m'observait avec consternation.

(Amélie Nothomb, *Stupeur et tremblements*)

談話解釈上の観点から *quand* 節と *comme* 節における半過去のふるまいのちがいを説明すると、次のようになる。*quand* 節において半過去を用いて場面設定（または場面特定）の機能を果たすためには談話内に何らかの利用可能な解釈資源が存在する必要がある、必然的に *quand* 節中での半過去の使用は限定的なものとなる。その一方で *comme* 節において半過去を用いる場合には主節の事態との関係によってひとつの文の中で半過去の解釈が成立するため、半過去の使用は特に問題とならない。

## 7. 結論と今後の課題

本稿では、時間的同時性を表す半過去が、主節との同時性を表す時況節と考えられている *quand* 節および *comme* 節の中で用いられる場合のふるまいのちがいを説明するために、これらの時況節の談話解釈上の機能と半過去の解釈メカニズムについて論じた。

主節との同時性を表すという共通点を持つ *quand* 節と *comme* 節それぞれの談話上の機能は異なっており、*quand* 節は場面設定（または場面特定）の機能を持つのに対して、*comme* 節は主節との間に時間的同時性や因果関係などの意味的關係が存在することを示す機能を持つ。このことから、それぞれの時況節における半過去のふるまいも異なることを具体例の分析により示した。

なお、今後明らかにすべき問題のひとつに、*quand* 節と主節の両方で半過去形が用いられた構文の解釈メカニズムはどのようなものであるのか？という問いがある。

先行研究では、主節と *quand* 節のどちらにも半過去が用いられている例の多くは反復・習慣解釈を受けると説明されている。ところが、次の例における主節および *quand* 節で用いられている半過去は 1 回限りの過去において展開中の事態を表していると解釈することが可能である。

(11) Plus tard, il *marchait* vers nous, dans le hall de l'hôtel, *quand* nous attendions assis l'un à côté de l'autre, sur le canapé.

(Patrick Modiano, *Accident nocturne*)

このような場合の *quand* 節の半過去の解釈メカニズムについても、主節の動詞が複合過去や単純過去の時と同様に捉えることができるのではないかと考えられるが、さらに多くの例を検討したうえで論じる必要があるため、今後の課題としたい。

また、主節に対して *quand* 節が前置される場合と後置される場合とで、構文の解釈メカニズムにちがいはあるのか？というのも、重要な問いである。

これらの問題について適切な説明を与えることは、とりもなおさず半過去の解釈メカニズムをより精緻な形に発展させることにつながるものと考えられるため、稿を改めて論じることとしたい。

## 参考文献

- Poisson-Quinton, Mimran, Reine et Mahéo-Le Coadic, Michèle. (2008) *Grammaire expliquée du français, Niveau intermédiaire*. CLE international.
- Sthioul, Bertrand.(1998) Temps verbaux et point de vue. Jacques Moeschler *et al.* (éds.) *Le temps des événements : pragmatique de la référence temporelle* :197-219. Éditions Kimé.
- 朝倉季雄（木下光一・校閲）(2005)『フランス文法集成』白水社.
- 高橋克欣(2014)「時を表す副詞節における半過去と談話的時制解釈」春木仁孝・東郷雄二編『フランス語学の最前線』2:pp.331-368.ひつじ書房.
- 高橋克欣(2016)『「こと」の認識「とき」の表現 - フランス語の *quand* 節と半過去』京都大学学術出版会.
- 東郷雄二(2011)『中級フランス語 あらわす文法』白水社.



## 『デュランダ城』における風景描写のダイクシス（その4）

瀧田恵巳

### 4.3.12. hinein

hinein に関しては、全9例中2例が風景描写に該当するが、hin-の用例全体においても風景描写はこの2例のみである。残り7例の内訳は、人物の移動が5例、見る動作が1例、発話行為が1例である。

風景描写に関しては、光の描写と音の描写が各1例見られる。例(62)の「きらきりと光が差し込む hineinfunkeln」という分離動詞は、空に輝く星から菩提樹の梢越しに小窓を通じて屋内に光が差し込む方向を表すことにより、外から屋内に至る広範囲の風景に関わっている。例(63)は先述の hinaus の例(53)に続く情景描写である。銃を撃ち放つ方向を表す hinaus に対して、hinein は、その時に起こった叫び声 Geschrei や呼ぶ声 Rufen、散発する銃声 Flinterschüsse が峡谷の中にまで響き渡る方向を表す。

(62) Bald darauf traf der Namenstag der Priorin, ein Fest, worauf sich alle Hausbewohner das ganze Jahr hindurch freuten; [...] Da verbreitete sich, als der Morgenstern noch durch die Lindenwipfel in die kleinen Fenster hineinfunkelte, schon eine ungewohnte, lebhafte Bewegung durch das ganze Haus, [...] (SD:14)

その後しばらくして、尼僧院長の聖名祝日がやってきた。それは修道院中の人みなが、一年中待ちに待った日だった。(中略) まだ暁の明星が菩提樹の梢ごしに、小窓のなかへきらきりとさしこんでいるころから、修道院には、いつにない活気がみなぎっていた。(省略) (188)

(63) [≧(53)] „Der Rasende!“ sagte er und befahl für jeden Fall die Zugbrücke aufzuziehen, dann öffnete er rasch das Fenster und schoß ein Pistol als Antwort in die Luft hinaus. Da gab es einen wilden Widerhall durch die stille Nacht, Geschrei und Rufen und einzelne Flintenschüsse bis in die fernsten Schlünde hinein, und als der Graf sich wieder wandte, sah er in dem Saal einen Kreis verstörter Gesichter lautlos um sich her. (SD:37)

「きちがい奴！」罵りながら彼は、ともかくも城のはね橋をひき上げておくよう命じ、すばやく窓をあけて、返答のピストルを空へ撃ちはなった。すると、荒々しい反響がわき上がり、叫び声や呼びかわす声、散発する銃声などが静かな夜をつらぬいて、はるか遠くの峡谷までもひびきわたった。伯爵がふりかえったとき、広間には何人もうろたえた顔が声もなく彼を囲んでいた。(214)

二つの風景描写について、hinein の示す方向の起点側への Hier/Origo の導入は極めて難

しい。例(62)において場面の中心は、*hinein* の示す方向を起点側である「暁の明星 *Morgenstern*」に留まるのではなく、その光が菩提樹の梢を通り抜け、小窓に差し込む先の修道院内へと移行する。例(63)については、当初場面の中心は確かに登場人物 *er* (伯爵 *Graf*) にある。しかし音響が峡谷まで響き渡る様は、*er* のいる起点側ではなく、目標側において初めて認識しうるものである。このように二つの風景描写の事例において、場面の描写は起点側に位置する存在の視野に限定されず、目標側に至るまで拡張された光景へ発展している。従って *Hier/Origo* を *hinein* の方向の起点側に導入することは極めて難しい。

ここで着目すべき点は、このような風景描写に際して読む側は場面を見渡すような立場に立たされるということである。このような読む側の立場は、既に瀧田 (2019: 28-29) で言及した Ehlich(1985: 253)による読者の *Origo*、及び瀧田 (2014: 92-93) による聴き手の視点に該当する。つまり例(62)と(63)において読者は現実世界から解放された聴き手として物語場面に介入しつつ、登場人物にも束縛されないことにより超越した立場をとり物語場面を見渡すことができるのである。

人物の移動を表す 5 例のうち、2 例は起点側に *Hier/Origo* を導入することができるが、3 例についてはその導入は難しい。例(64)の *hinein* は話し手が自分の家の中に入りたいと申し出る会話文に用いられている。このとき話し手は方向の起点側にいるので、起点側への *Hier/Origo* の導入は問題なく成立する。その他 4 例の *hinein* は地の文に用いられる。例(65)の *hinein* は、それまで場面の中心を担ってきた登場人物 *er* (レナルト *Renald*) の移動方向を表すが、その移動は起点側にいる *sie* によって見送られるため、起点側に *Hier/Origo* を導入することができる。それに対して例(66)の *hinein* は、(65)と同様に *er* (レナルト *Renald*) の移動方向を表すが、その移動に伴い物語場面も移行することから、*er* が依然場面の中心であることがわかる。例(67)においても、登場人物 *er* (伯爵 *Graf*) が *hinein* によって示される方向へ移動するのに伴い、場面も移行する。このように例(66)と(67)の場合、*hinein* の示す方向へ場面の中心そのものが移動するため、その方向の起点側に *Hier/Origo* を導入することは難しい。例(68)の *hinein* は「新しい、見たこともない世界 *eine neue, ganz fremde Welt*」への方向を表す。その目標側の世界はその時点における *Gabriele* の居場所を描写したもので、*Gabriele* を中心に描かれていることから、*hinein* の起点側に *Hier/Origo* を導入することは極めて難しい。

(64) Als er aber mit klopfendem Herzen auf dem altbekannten Fußsteig immer weiter ging, öffnete sich bei dem Hundegebell ein Fensterchen im Jägerhaus. Es gab ihm einen Stich ins Herz; es war Gabrielens Schlafkammer, wie oft hatte er dort ihr Gesicht im Mondschein gesehen. Heut aber guckte ein Mann hervor und fragte barsch, was es draußen gäbe. Es war der Waldwärter, der heimtückische Rotkopf war ihm immer zuwider gewesen. „Was macht Ihr hier in Renalds Haus?“ sagte er. „Ich bin müde, ich will hinein.“ (SD:29-30)

胸を高鳴らせながらよく知った小道を歩いて行くと、犬の吠声を聞いて猟師小屋の小窓が

開かれた。彼ははっと胸をつかれた。それはガブリエレの寝室の小窓だったのだ。いくたび彼はそこに、月の光をあびたガブリエレの顔を見たことだろう。だがそこから今、一人の男が顔をだし、外にいるのは誰かと無愛想にたずねた。森番の男だ。レナルトは以前からこの狡猾な赤毛の男が大嫌いであった。レナルトは言った。「おまえはレナルトの家で何をしている？俺は疲れている。入って休みたいのだ」 (206)

(65) Er sah so schrecklich aus, sein Haar war grau geworden über Nacht; niemand wagte es, ihm jetzt zu widersprechen. Darauf sahen sie ihn allein rasch und schweigend in das leere Schloss hineingehen, [...] (SD:48)

その顔は見るも恐ろしく、髪は一夜のうちに灰色に変っていた。誰も今、彼に異議を唱える勇氣はなかった。やがて人々は、レナルトがひとり、人気のなくなった城へ足ばやに無言で入って行くのを見た。(226)

(66) Es war ein schöner, blanker Herbstabend, als er in der Ferne Paris erblickte; die Ernte war längst vorüber, die Felder standen alle leer, nur von der Stadt her kam ein verworrenes Rauschen über die stille Gegend, das ihn heimlich schauerte. Er ging nun an prächtigen Landhäusern vorüber durch die langen Vorstädte immer tiefer in das wachsende Getöse hinein, [...] (SD:19)

遠方に巴里を望んだのは、美しく輝く秋の暮れ方であった。刈入れはとつくに終わり、田畑はどこもがらんとしていた。ただ、街の方角から、静かな野を超えてただよってくる錯綜としたどよめきに、彼はひそかにおののくのだった。彼は郊外の幾多の壮麗な別荘を通りすぎ、高まりゆく轟音にますます近づいていった。(省略) (194)

(67) Eine Weile starrt' er hin, dann, von Entsetzen überreizt, vergißt er alles andere, und unkennt den Haufen teilend, der wütend nach dem Haupttor dringt, eilt er selbst dem gespenstischen Schlossflügel zu. Ein heimlicher Gang, nur wenigen bekannt, führt seitwärts näher zum Balkon, dort stürzt er sich hinein; [...] (SD:41)

伯爵は、しばらくの間それを見すえていたが、やがて恐ろしさに魅入られたようにわれを忘れ、猛り狂って正面入口へ殺到する群集をかき分けて、見破られることなくあの生霊のいる側翼へと急いだ。彼は少数の者しか知らぬ秘密の廊下に駆けこんだが、それはバルコニーに通ずる近道だった。(省略) (218)

(68) Frische Blumensträuße standen in bunten Krügen am Fenster, ein Kanarienvogel schmetterte gellend dazwischen, denn die Morgensonne funkelte draußen schon durch die Wipfel und vergoldete wunderbar die Zelle, das Betpult und die schwergewirkten Lehnstühle; Gabriele lächelte fast betroffen wie in eine neue, ganz fremde Welt hinein. (SD:9)

窓辺には摘みとったばかりの花々が色とりどりの瓶にいけられてあり、一羽のカナリアがかん高い声で囀っていた。朝日がもう木々の梢をとおしてきらきらとさしそめ、庵室を、祈祷台を、どっしりとした織布の安楽椅子を、不思議な金色の光でみたしていた。ガブリエレは、新しい、見たこともない世界に迷いこんでしまったかのように、ほとんど当惑し

てほほえんでいた。(183)

例(69)の *hinein* は発言動作の方向を表す。発言動作の主体は動作方向の起点側にあるため、ここに *Hier/Origo* は問題なく導入される。例(70)ののぞき込む動作の方向を表す *hinein* も同様に、動作の主体は動作方向の起点側にあるため、*Hier/Origo* は起点側に置かれる。

(69) „Wer ist da?“ rief er auf einmal in den Garten hinein. (SD:45)

「誰だ？」突然彼は庭園の奥に呼びかけた。(223)

(70) Da wand sie sich schnell los. „Mein Gott, liebst du mich denn noch, [...]“ sagte sie voll Erstaunen, die großen Augen fragend zu ihm aufgeschlagen. – Ihm war's auf einmal, wie in den Himmel hineinzusehen. (SD:42)

すると娘はすばやく身をもぎ放した。「まあ、では私をまだ愛して下さっているの？(中略)」彼女は驚きでいっぱいになった目をみはって、いぶかしげに彼を見上げた。一彼は、突然、はるかな空をのぞき こんだ ような気がした。(219)

以上のように *hinein* の全9例には2例の風景描写が認められる。また *Hier/Origo* の起点側への導入に関しては、人物移動の2例と発言行為1例と見る行為1例には認められるが、風景描写の2例、人物移動の3例についてはその整合性が極めて低いことが判明した。

#### 4.3.13. hinüber

*hinüber* は1例のみで人物の移動方向を表し、風景描写に該当する例は見られない。例(71)の *hinüber* は、*hinaus* の例(45) に続く場面で、伯爵 Graf のいる谷間 Tal からドイツ Deutschland への方向を表すことから、起点側の Graf に *Hier/Origo* を導入することができる。

(71) [≥(45)] Weiter erfuhr nun der Graf noch, wie ein Pariser Kommissär das alles so rasch und klug verordnet. Die Nonnen sollten nun in weltlichen Kleidern hinaus in die Städte, heiraten und nützlich sein; da zogen alle in einer schönen stillen Nacht aus dem Tal, für das sie so lange gebetet, nach Deutschland hinüber, wo ihnen in einem Schwesterkloster freundliche Aufnahme angeboten worden. (SD:35)

さらに伯爵は、巴里の人民委員がすべてをいかにすばやくぬけめなく片付けてしまったかを知った。修道女たちは今や僧服を脱ぎ、街に出て結婚し、有用な人間にならねばならぬと命令されたのだ。そこで彼女らはみな、美しい静かなある夜、長年祈りをささげてきたこの谷間を出て、ドイツへと 逃れ、その地の姉妹修道院にやさしく迎えられたのだった。(212)

#### 4.4. 分析結果

4.3 では her- と hin- の用例を風景描写とそれ以外に分け、それぞれ Hier/Origo 導入の整合性について検討した。

表 2 は her- と hin- の風景描写とそれ以外の用例数、全用例数、そして総数における割合 (%) を括弧内に表示したものである。全体における風景描写の用例数の割合は、her- は総数 28 例中 6 例で 21.4%、hin- に関しては総数 39 例中 2 例でわずか 5.1% に過ぎず、全体的に決して大きな割合とは言えない。風景描写の総数を比較すると、her- は 6 例、hin- は 2 例で her- の方が多い。語彙別でみると her- は herauf と herüber、hin- は hinein に限定され、herüber は全 3 例とも風景描写であり 100.0% という最も高い割合を占め、次に herauf の 42.9%、最後に hinein の 22.2% が続く。この点から herüber は風景描写の傾向が極めて強いといえる。

	her-	風景描写	それ以外	全用例数	hin-	風景描写	それ以外	全用例数
-ab	herab	0	4 (100.0)	4	hinab	0	7 (100.0)	7
-unter	herunter	0	1 (100.0)	1	hinunter	0	1 (100.0)	1
-auf	<b>herauf</b>	<b>3 (42.9)</b>	4 (57.1)	<b>7</b>	hinauf	0	3 (100.0)	3
-aus	heraus	0	6 (100.0)	6	hinaus	0	18 (100.0)	18
-ein	herein	0	7 (100.0)	7	<b>hinein</b>	<b>2 (22.2)</b>	7 (77.8)	<b>9</b>
-über	<b>herüber</b>	<b>3 (100.0)</b>	0	<b>3</b>	hinüber	0	1 (100.0)	1
合計		<b>6 (21.4)</b>	22 (78.6)	<b>28</b>		<b>2 (5.1)</b>	37 (94.9)	<b>39</b>

表 2 風景描写とそれ以外の用例数（全用例数における割合%）

表 3 は、風景描写の用例について Hier/Origo の導入に高い整合性が認められる用例数と全用例数、そして総数における割合 (%) を括弧内に表示したものである。her- に分類される herauf と herüber については、方向の目標側に Hier/Origo の導入が認められる用例の割合は 66.7% とかなり高い。それに対して hin- の場合、hinein の 2 例において方向の起点側に Hier/Origo を導入することは極めて難しく、その割合は 0.0% である。このように Hier/Origo との整合性は her- と hin- との間で大きく異なる。

	her-	整合性の高い用例数	風景描写の全用例数	hin-	整合性の高い用例数	風景描写の全用例数
-ab	herab	0	0	hinab	0	0
-unter	herunter	0	0	hinunter	0	0
-auf	<b>herauf</b>	<b>2 (66.7)</b>	<b>3</b>	hinauf	0	0
-aus	heraus	0	0	hinaus	0	0
-ein	herein	0	0	<b>hinein</b>	<b>0 (0.0)</b>	<b>2</b>
-über	<b>herüber</b>	<b>2 (66.7)</b>	<b>3</b>	hinüber	0	0
合計		<b>4 (66.7)</b>	<b>6</b>		<b>0 (0.0)</b>	<b>2</b>

表 3 風景描写のうち Hier/Origo 導入の整合性の高い用例数（全用例数における割合%）

表4は、風景描写以外の用例に関する Hier/Origo との整合性の高い用例数、および語彙別の全用例数と総数における割合 (%) の数値を括弧内に表示したものである。総数における Hier/Origo との整合性の高い用例数の割合は her-が 54.5%、hin-が 59.5%でともに比較的高い割合を占めている。風景描写の割合 (her-は 66.7%、hin-は 0.0%) と比較すると、her-はやや少ないが、hin-ははるかに高い割合を占めている。語彙別でみると、最も高い割合 (100.0%) を示すのは her-については herunter と herauf であり、風景描写の 66.7%をはるかに凌駕している。hin-については hinüber の割合が 100.0%で最も高く、その後 hinauf (66.7%)、hinaus (61.1%)、hinab と hinein (ともに 57.1%) が続く。この結果は Hier/Origo 導入の整合性の高さが風景描写に限定されないことを示している。

	her-	整合性の高い用例数	風景描写以外の全用例数	hin-	整合性の高い用例数	風景描写以外の全用例数
-ab	<b>herab</b>	<b>1 (25.0)</b>	<b>4</b>	<b>hinab</b>	<b>4 (57.1)</b>	<b>7</b>
-unter	<b>herunter</b>	<b>1 (100.0)</b>	<b>1</b>	hinunter	0	1
-auf	<b>herauf</b>	<b>4 (100.0)</b>	<b>4</b>	<b>hinauf</b>	<b>2 (66.7)</b>	<b>3</b>
-aus	<b>heraus</b>	<b>3 (50.0)</b>	<b>6</b>	<b>hinaus</b>	<b>11 (61.1)</b>	<b>18</b>
-ein	<b>herein</b>	<b>3 (42.9)</b>	<b>7</b>	<b>hinein</b>	<b>4 (57.1)</b>	<b>7</b>
-über	herüber	0	0	<b>hinüber</b>	<b>1 (100.0)</b>	<b>1</b>
合計		<b>12 (54.5)</b>	<b>22</b>		<b>22 (59.5)</b>	<b>37</b>

表4 風景描写以外のうち Hier/Origo 導入の整合性の高い用例数 (全用例数における割合%)

表5は、用例全体から見た Hier/Origo 導入の整合性の高い用例数、全用例数、そして総数における割合 (%) を括弧内に表示したものである。総数における整合性の高い用例数の割合は、her-が 57.1%、hin-が 59.0%でともに比較的高い割合を占めている。しかし表3と表4から明らかなように、Hier/Origo との整合性の高い用例数の内訳は異なる。her-の場合は全体的に風景描写の方がそれ以外の用例よりもやや高い割合を占めるが、hin-については風景描写以外の用例がこの割合を支えている。

	her-	整合性の高い用例数	全用例数	hin-	整合性の高い用例数	全用例数
-ab	herab	1 (25.0)	4	hinab	4 (57.1)	7
-unter	herunter	1 (100.0)	1	hinunter	0	1
-auf	herauf	6 (85.7)	7	hinauf	2 (66.7)	3
-aus	heraus	3 (50.0)	6	hinaus	11 (61.1)	18
-ein	herein	3 (42.9)	7	hinein	4 (44.4)	9
-über	herüber	2 (66.7)	3	hinüber	1 (100.0)	1
合計		<b>16 (57.1)</b>	<b>28</b>		<b>23 (59.0)</b>	<b>39</b>

表5 Hier/Origo との整合性の高い用例数 (全用例数における割合%)

## 5. 考察

4.4の分析結果から考察すると、2で示した Alewyn(1957/1974)と Ehlich(1985)による見解は、非常に微妙なバランスの上に成立していることがわかる。

まず Alewyn(1957/1974: 221-222)の見解は、Hier「ここ」を導入手段として her-と hin-が頻出し、さらに her-の方が hin-よりも頻繁に用いられるというものであった。この見解は本論文の分析結果したがって、次の二つの観点から考察し、以下の結論が得られた。

第一に風景描写において her-の方が hin-よりも多用されるという Alewyn(1957/1974)の指摘に関しては、本論文の分析においても her-の用例の方が hin-の用例よりも多い(表1)という結果が得られた。しかし風景描写の事例が見られる語彙は herauf と herüber と hineinに限られ、共通する方向で見ると、確かに-auf と -über に関しては her-の方が優勢といえるが、-ein に関しては hin-の方が優勢である。

第二に her-と hin-が Hier/Origo の導入手段として用いられ、一方では来る、他方では行くという方向を与えるという指摘に関しては、本論文の分析からいえば、her-に関しては当てはまるが、hin-については当てはまらない。風景描写における Hier/Origo の導入に関する分析結果によると、her-の示す方向の目標側に Hier/Origo が導入される用例数は 66.7%という比較的高い割合を占めるが、hin-の示す方向の起点側に導入される用例数の割合は 0.0%である(表3)。つまり herauf と herüber の用例については、方向の目標側に存在する知覚主体に Hier/Origo が導入され、遠くからの音響や光の運行を受け止めるような描写がなされる傾向が強いが、hinein の示す方向の起点側には、そこから離れていくような遠近の効果は薄いということが、この分析結果により示されている。

用例数と Hier/Origo との整合性の高さを合わせて考慮するならば、Alewyn(1957/1974)の指摘する風景描写における her-の特徴は、本論文の分析結果からも十分に認められるものの、hin-による風景描写における Hier/Origo の効果を支持する結果は得られなかった。また her-の風景描写を表す残り 2 例にも目標側への Hier/Origo の導入は認められない。

なお風景描写以外の Hier/Origo 導入の整合性の高い用例数については、her-が 54.5%、hin-が 59.5%とともに比較的高い割合を占めている(表4)。風景描写の割合(her-は 66.7%、hin-は 0.0%)と比較すると her-はやや少ないが、hin-に関してははるかに高い割合を占めている。またそのうち最も高い割合(100.0%)を示すのは herunter と herauf、そして hinüberであり、her-については風景描写の割合 66.7%をはるかに凌駕している。以上の点から考慮すると、Hier/Origo の導入は必ずしも風景描写に特有の現象とは言えない。

Hier/Origo 導入の傾向のみに関して言えば、Alewyn(1957/1974)だけでなく Ehlich(1985)もまた指摘している。Hier/Origo が her-の目標側及び hin-の起点側に導入されるというこの傾向は、全体的な用例数における該当例の数の割合としては her-が 57.1%、hin-が 59.0%で比較的高い割合を占め(表5)、ある程度の妥当性が認められる。

その一方で her-の表す方向の目標側及び hin-の表す方向の起点側に Hier/Origo が導入されるとはみなされない用例数の割合は 40%以上を占めている。従って Hier/Origo が her-の

目標側ないし hin-の起点側に導入される傾向は、ある程度の妥当性は認められるものの、her-と hin-の用法全体を網羅するとはいえない。

## 6. まとめと今後の課題

Eichendorff の作品では her-と hin-が風景描写に多用され、それぞれ Hier/Origo が導入されるという Alewyn(1957/1974)の見解とそれに加わる Ehlich(1985)の見解をうけ、本論文では『デュランデ城』Das Schloss Dürandeにおける her-と hin-の用例を風景描写とそれ以外の用例に分け、全体における割合を算出し、Hier/Origo の導入の整合性を検討した。

本論文の分析結果からいえば、風景描写に関わる Alewyn(1957/1974)の指摘は、her-の hin-に対する優勢と her-における目標側への Hier/Origo の導入に関しては十分に認められるが、hin-における起点側への Hier/Origo の導入については妥当とは言えない。また Hier/Origo の導入は、必ずしも風景描写に特有の現象というわけではなく、風景描写以外の用例においても比較的高い整合性が見られた。さらに風景描写に限定せず用例全体として見ると(表5)、Alewyn(1957/1974)と Ehlich(1985)の指摘するように、Hier/Origo が her-の目標側ないし hin-の起点側に導入される傾向はある程度認められるが、全体の傾向とするには不十分であるという結論に至った。

以上の本論文の分析の過程では、さらに次の点が明らかになった。

第一に her-と hin-の全用例における風景描写の割合(表2:her-は総数28例中6例で21.4%、hin-総数39例中2例で5.1%)に過ぎず、決して多いとは言えない。この点から考えると、風景描写は her-と hin-のプロトタイプ的な用法ではない。

第二に Hier/Origo の導入の整合性はある程度認められるが、用例数の割合にして40%以上の反例も見られた。反例のパターンは多様であり、これらを説明するには、her-の目標側ないし hin-の起点側に位置する Hier/Origo 以外の概念装置が必要である。

明らかに her-の示す方向の目標側に Hier/Origo を導入することができないケースは heraus と herein において顕著に見られた。中でも最も際立っているのが、herein の例(27)に見られる „Ich muss herein“という会話文である(瀧田2019:28)。これは部屋の外にいる話し手が室内にいる相手に呼びかける会話文で、Hier/Origo の導入先として最も典型的な知覚主体であるはずの話し手は起点側に位置する。屋内への方向を表す herein の例(25)と例(26)においても、話し手及び間接話法の現話者のいる場所は屋外である(瀧田2019:27-28)。実際には内部にいない話し手が内部空間側の立場をとって herein を用いるとすれば、2章の先行研究として紹介した Jahn(1937:61)が指摘する her-と hin-の効果、すなわち想像によって外界の出来事のある個人に結び付けて体験させる効果(瀧田2019:23)も考えられるが、例(25)と例(26)については外界の出来事を体験する個人は目標側には特に設定されていない。また日本語では例(27)の場合「入ってくる」とは言えないが、例(25)と例(26)では可能であろうという点も検討の余地がある。heraus については、Hier/Origo の相当する話し手や中心的な登場人物による見る動作(例19)、発言行為(例20)、譲渡行為

(例 21)、Hier/Origo は動作方向の起点側に位置する (瀧田 2019: 25-26)。方向の目標側への Hier/Origo の非導入性が顕著な heraus と herein はともに内外の空間に関わるが、この点も今後考慮に入れる必要がある。

さらに場面の中心の移動を伴う登場人物の移動の方向を表す用例も反例として挙げられる。その該当例は、her-に関しては herab の例(6)のみである (瀧田 2019: 22)。一方 hin-に関しては、hinab の例(38)と(39) (瀧田 2020: 4)、hinunter の例(40) (ibid. 4-5)、hinauf の例(41) (ibid. 5)、hinaus の例(48)~(51) (ibid. 7-8)、hinein の例(66)と(67)と多数で広範囲に及ぶ。これらはいわば Origo の移動であり、3 で紹介した Bühler(1934/1982: 124ff.)による想定上のダイクシスの第二の主要事例「転移 *Versetzung*」(瀧田 2018: 27) に該当する。

物語冒頭部分で擬人化された廃墟が寂寥の中を見る方向を表す herein の例(28)に関しては、Ehlich(1985: 253) が読者の Origo を導入することにより解釈している (瀧田 2019: 28-19)。また風景描写に関わる hinein の例(62)と(63)においても、場面の描写は起点側に位置する存在の視野に限定されず、目標側に至るまで拡張された光景へ発展しており、読者は場面を見渡すような立場に立たされる。このような読む側の立場は、瀧田(2019: 28-29)で言及したように、Ehlich(1985: 253)による読者の Origo 及び瀧田(2014: 92-93)による聴き手の視点に該当する。つまりこの時読者は現実世界から解放された聴き手として物語場面に介入しつつ、登場人物にも束縛されないことにより物語場面を見渡すことができる超越的な立場をとると解釈することができる。一方、herab の静物の無意志的な動きを表す例(7)と例(8)における Hier/Origo に相当する登場人物の眼前にある髪動きやろうそくの様子をクローズアップする描写については、読者の Origo 及び聴き手の視点が描写対象に接近するという解釈も成立する。すでに瀧田(2019: 29-30) で説明したように、そもそも Hier/Origo は、物語次元における知覚主体であり、西郷(1975: 73-80, 341)の提唱する「視点人物」、即ち視点を設定された人物に相当し、語り手と聴き手は視点人物を自らの視点のよりどころとして物語状況に関わる。したがって Hier/Origo の導入に関して整合性の低い用例を分析するには、送り手と受け手というコミュニケーション関与者に由来しつつも解放され、また物語の登場人物にも束縛されない別次元の要素、即ち Ehlich(1985: 253)による読者の Origo 及び瀧田(2014: 92-93) による聴き手の視点に該当する要素を取り入れる必要があると考えられる。

今後の課題としては、本論文の分析結果では 40%以上の割合を占める Hier/Origo の導入の反例を検討する。ただしその際には、her-と hin-の中心的な用法が風景描写ではないこと、物語次元における知覚主体としての Hier/Origo の導入の整合性はある程度認められるといった本論文で得られた結論も踏まえる必要がある。こうした前提に基づいて、方向の特徴や Bühler(1934/1982:124ff.)による「転移 *Versetzung*」のような Origo に関するさらなる概念、読者の Origo 及び聴き手の視点といった別次元の概念装置を取り入れて、分析を行う。

さらに本論文では言及しなかったが、版によって her-と hin-の記述が入れ替わる用例も見られた。なぜこのような相違が生じたのかという問題についても今後の課題としたい。

## 参考文献

- Alewyn, Richard (1957/1974):** Eine Landschaft Eichendorffs. In: Alewyn, Richard: Probleme und Gestalten: Essays, Insel Verlag, Frankfurt am Main 1974, 203-231. (Erstdruck: Euphorion 51, 1957, 42-60.) (渡辺洋子訳「アイヒェンドルフの風景」『ドイツ・ロマン派論考』1984年, 303-340.)
- Bühler, Karl (1934/1982):** Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934). (脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論 言語の叙述機能 上巻』クロノス, 1983.)
- Ehlich, Konrad (1985):** Literarische Landschaft und deiktische Prozedur: Eichendorff, in: Harro Schweizer (Hg.): Sprache und Raum. Psychologische und linguistische Aspekte der Aneignung und Verarbeitung von Räumlichkeit. Ein Arbeitsbuch für das Lehren von Forschung, Metzler, Stuttgart, 246-261.
- Jahn, Gisela(1937) :** Studien zu Eichendorffs Prosastil (Palaestra Bd.204), Mayer & Müller, Leipzig.
- 西郷竹彦 (1975) :** 『西郷竹彦文芸教育著作集 第17巻 文芸学講座(I)視点・形象・構造』明治図書.
- 瀧田恵巳(2014) :** 「ダイクシスから見た物語構造」, 『言語文化研究 40号』大阪大学大学院言語文化研究科, 83-104.
- 瀧田恵巳(2018a) :** 「二つの Origo と視点」, 『言語文化研究 44号』大阪大学大学院言語文化研究科, 69-88.
- 瀧田恵巳(2018b):** 『『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その1)』『言語文化共同研究プロジェクト 2017・時空と認知の言語学VII』大阪大学大学院言語文化研究科, 21-30.
- 瀧田恵巳(2019):** 『『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その2)』『言語文化共同研究プロジェクト 2018・時空と認知の言語学VIII』大阪大学大学院言語文化研究科, 21-30.
- 瀧田恵巳(2020):** 『『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その3)』『言語文化共同研究プロジェクト 2019・時空と認知の言語学IX』大阪大学大学院言語文化研究科, 1-10.

## 例文出典

- Eichendorff, Joseph von: Das Schloss Dürande, Philipp Reclam jun. Verlag, Stuttgart, 2011. [略号SD] (渡辺洋子訳「デュランデ城」前田道介編『アイヒェンドルフ (ドイツ・ロマン派全集第六巻)』国書刊行会, 1983年, 175-228.)

## Cross-Indexing View からみた中央アラスカ・ユピック語の人称接辞に関する一考察

田村幸誠  
(大阪大学)

### 1. はじめに

まず、次の (1) に示した、Siewierska による「人称代名詞から一致のマーカ―への文法化」の記述をみてみよう。

- (1) “The endpoint of the historical evolution of agreement marker from person pronoun is the loss of referentiality on the part of the person marker and the obligatory presence of the nominal argument with which it agrees.” Siewierska (1999: 225)

例えば、英語の *He speaks English.* において、一般に、*he* は人称代名詞 (personal pronoun) で、*speaks* の *-s* は、一致 (agreement) のマーカ―であると分類される。世界の 200 以上の言語を観察した Siewierska は、通言語的な特徴を踏まえた 1 つの文法化の道筋として (1) のことを提案している。つまり、世界の言語に共通して観察される傾向として、*he* のような人称代名詞は、やがて、*-s* のような一致のマーカ―に文法化していくというものである。

Siewierska によるこの「人称代名詞から一致のマーカ―への文法化」は、通言語的に妥当な観察とみなされる一方で、類型論の分野において、何を「人称代名詞」とみなし、何を「一致のマーカ―」とみなすかに関して新たな議論を呼ぶことになった (e.g. Corbett (2006); Dixon (2010))。例えば、次の (2) の文を観察してみよう。グルジア語 (Georgian) では、‘I eat it.’ という意味における、主語と目的語の関係が (2a) で分かるように、動詞の人称接辞で表され、*V-∅-č’am* という 1 つの動詞で 1 つの文が成立している。加えて、(2a) は (2b) のように、主語と目的語を代名詞を伴った形でも表現することが出来る (動詞の形には変化がないことに注意されたい)。

- (2) グルジア語 (Georgian, a Kartvelian; Boeder 2002: 98-99; cited from Haspelmath (2013: 197))
- a. *V-∅-č’am.*  
1.SUBJ-3.OBJ-eat  
‘I eat it.’
- b. *Me V-∅-č’am ma-s.*  
I 1.SUBJ-3.OBJ-eat it-DAT

(2) における人称接辞、*-V*-(1.SUBJ) と *-∅*-(3.OBJ) は、通常の基準では代名詞とは呼べるも

のではない。それは、動詞の接辞（拘束形態素）として、動詞の一部に現れており、例えば、英語の代名詞の *he* や *it* のように自由形態素として振る舞い、かつ、名詞（句）の代わり（*pronoun*）として機能するものではないからである。また、同時に、*-I-* (1.SUBJ) と *-Ø-* (3.OBJ) は、通常の基準では、一致のマーカールと呼べるものでもない。それは、(2a) と (2b) が示すように、先行詞（*controller*）として働く名詞句の存在が、例えば、英語の一致現象（e.g. *John/He speaks English; \*speaks English.*）のように、同一節内において義務的ではないからである。

(1) の文法化現象との関係で、特に興味深い事実は、Siewierska (1999) によれば、動詞の人称接辞に関して、世界の言語の中で (2) のグルジア語のようなパターンを示す言語が最も一般的に観察されるタイプで、英語のように同じ節に動詞の人称接辞の先行詞が義務的に伴う必要のある言語は、全体の3%程と、極めて稀であるということである（Siewierska (1999), cf. Haspelmath (2013:210)）。Haspelmath (2013) は Siewierska (1999) の大規模な記述調査を受けて、(1) の文法化の根底にある認知的な原理として、*double-expression view* という考え方を人稱接辞に用いることを提案している。また、Siewierska も後に、Siewierska (2011:334) において、*double-indexation analysis* と呼ぶほぼ同じ考えを提案している。本論文では、以下において、*double-expression view* と *double-indexation analysis* を *cross-indexing view* という用語に統一して用いる。

本論文では、次節において、(1) を前提とした Haspelmath (2013) の人稱接辞に関する議論のポイントをまとめ、その上で、3節でその考え方を中央アラスカ・ユピック語（*Central Alaskan Yup'ik, an Eskimo-Aleut*; 以下 CAY と記す）の関連事例に応用することを試みる。3.1節では、*cross-indexing view* が CAY の一致現象の実態に上手く機能することを考察する。さらに、3.2節では、一致に関する *cross-indexing view* という認知的な原理が、動詞人稱接辞と項の一致という局所的な現象を超えて、意味的格によってマークされる CAY の場所表現の意味解釈にも機能していることを指摘する。4節は結語とする。

## 2. Haspelmath (2013) の論考と争点

では、Haspelmath (2013) の論考のポイントをまとめることにしよう。Haspelmath (2013) は、(1) の文法化で見られる人稱接辞の段階を、(I) *Gramm-Indexes*、(II) *Cross-Indexes*、(III) *Pro-Indexes* という3つの段階に大きく分けている。次の例文 (3) から (5) は、各段階からそれぞれ1つずつ例を取り出したものである。まず、(3) は、Haspelmath が *Gramm-Indexes* と呼ぶタイプのもので、特徴は動詞の人稱接辞が項名詞句と共起することが義務的なことである。(3a-c) の最後の括弧にあるように、項名詞句が具現化されていない場合、非文となるタイプである。

### (3) *Gramm-Indexes* （項名詞句との共起が義務であるタイプ）

ドイツ語 (German; Haspelmath (2013: 206))

- a. *Ich komm-e* ‘I come’ (\**komm-e*)
- b. *du komm-st* ‘you come’ (\**komm-st*)
- c. *sie komm-t* ‘she comes’ (\**komm-t*)
- d. *Elli komm-t* ‘Elli comes’

(cf. 英語: *Mary come-s; she come-s; \*come-s*)

次に、(4) は (上の (2) も)、Haspelmath が *Cross-Indexes* と呼ぶタイプのもので、特徴は

動詞の人称接辞が項名詞句と共起することが随意的で、先行詞 (controller) が同じ節になくても成立するタイプの人称接辞である。上の (2) と同様に、(4) において全く同じ動詞、*Gan-angu* (3SG.3SG-handle) が2つの文で用いられていることに注意されたい。上でも述べたが、この Cross-Indexes タイプが世界の言語で最も多く観察されるものである (cf. Siewierska (1999, 2011))。また3節で扱う CAY もこのタイプに属する (今節例文 (8) を参照)。

(4) Cross-Indexes (項名詞句との共起が随意的であるタイプ (例文 (2) はこのタイプ))  
 ジャミンjung語 (Jaminjung, a Mirndi; Schultze-Berndt (2000: 154), cited from Haspelmath (2013: 207))

- a. *Gan-angu*                      *warrag*.  
 3SG.3SG-handle              catfish  
 ‘(S)he caught a catfish.’
- b. *Nalyarri-ni*      *Gan-angu*                      *warrag*.  
 Nalyarri-ERG    3SG.3SG-handle              catfish  
 ‘Nalyarri caught a catfish.’

最後に、(5) は Haspelmath が Pro-Indexes と呼ぶタイプのもので、特徴は動詞の人称接辞が項名詞句と共起することが出来ないタイプのものである。(5a) において、主語 *Ade* がある場合、動詞に人称接辞が接続されておらず、また、(5b) のように、主語が項名詞句で明示されていない場合に、人称接辞が現れているのを確認されたい。

(5) Pro-Indexes (項名詞句との共起が不可能であるタイプ)  
 オコ語 (Oko, a Benue-Congo; Atoyebi (2010:87), cited from Haspelmath (2013: 208))

- a. *Ade cina*      *óbín*  
 Ade    become    king  
 ‘Ade has become a king.’
- b. *È-cina*                      *óbín*  
 3SG.SUBJ-become              king  
 ‘He has become a king.’
- c. \**Ade è-cina*              *óbín*

問題は (3) から (5) にみられる人称接辞と先行詞 (controller) の関係に関してどのような一般化、及び説明がなされるのかということにある。Haspelmath (2013)、そして Siewierska (2011) が共通して指摘する先行研究の問題点は、(3) から (5) にみられる分布を「一致」あるいは「代名詞」のどちらかに押し込めて、統一的な記述を図ろうとすることにあるという。まず、「一致」の方から始めると、これは Haspelmath (2013: 209-210) が *virtual agreement view* と呼び、Siewierska (2011: 333) が *agreement analysis* と呼ぶもので、「一致」を拡大解釈して全体の分布を捉えようとするものである。つまり、(3) のタイプをモデルに、(4) と (5) のタイプにみられる人称接辞も同じ様に分析するものである。この分析の問題点は、例えば、(4a) (や (5b)) の人称接辞の存在を動機づけるために、実際には存在しないにも関わらず、架空の (virtual) 項名詞句 (この場合は主語項) が存在すると仮定する必要があることである。まず、広く認知言語学 (Langacker 1991; 2008) の立場にたてば、説明のために「音」という実態を伴

わなない理論的構築物を設定することは content requirement の違反であり、説明としては成立していないとみなされる。加えて、上でも述べたが、全体でヨーロッパの言語を除いてほとんど観察されない (3) のパターンをモデルに、最も多く観察される (4) のタイプを「架空の項」を立ててまで説明しようとすることもある。客観的な言語の類型を捉えたい類型論において、この説明は自分たちの慣れ親しんだ発想を他の言語に当てはめた分析に過ぎないという危惧が強く残り、通言語的に説得力のないヨーロッパ中心主義的な分析とみなされる (Haspelmath (2013: 210) cf. Shibatani 2021; もう一つの理論的な問題は下で触れる)。

次に、「代名詞」の解釈を拡大し、(4a) や (5b) にみられる人称接辞を「代名詞」としてみなす考え方である (Haspelmath (2013: 210) は bound-argument view と呼び、Siewierska (2011: 333) は pronominal argument analysis と呼んでいる)。つまり、(4) や (5) に観察される人称接辞を拘束形態素であるけれども、理論的には、(3) における (自由形態素の) 代名詞と同じようにみなすべきだというものである。この考え方は下の (6) や (7) の言語をモデルに想定されたものと考えられる。

(6) ラコタ語 (Lakhota, a Siouan; Siewierska (2011:333))

*Miyé mathó ki Ø-wa-kté*  
 I bear the 3SG-1SG-kill  
 ‘I killed the bear.’

(7) ナバホ語 (Navajo, an Athabaskan; Willie (1989:415))

*‘atééd yizts’os*  
 girl 3SG.OBJ:3SG.SUBJ:kiss  
 ‘He kissed the girl/The girl kissed him.’

(6) と (7) において、動詞に主語・目的語の関係が人称接辞で示され、かつ、名詞には格表示等がないことに気づかれない。この特徴を根拠に、ラコタ語やナバホ語において、動詞の項が表示される場所は動詞の接辞であり、(6) の *Miyé* (I) や *mathó ki* (the bear)、また (7) の *atééd* (girl) は項名詞ではなく、不加詞 (adjunct) であるという主張がなされる。

しかし、Haspelmath そして Siewierska のどちらもが指摘しているように、人称接辞を動詞の項としてみなすために、そのように名詞句を一様に不加詞とみなすことは通言語的に支持が得られないものとなる。例えば、下の (8b) の CAY では、主語と目的語どちらの名詞句も格表示が必ず伴うものでなければならない (実際、(4b) でも名詞句に格表示が与えられている)。つまり、先行詞 (controller) なしの人称接辞を動詞にマークすることと、表出した項名詞句が格等の表示を受けない (あるいは受ける) ということの2つの文法現象には通言語的な相関関係は恐らくないと考えられる (cf. Nichols (1986) による head-marking と dependent-marking の議論)。

(8) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

- a. *Nunu-lar-a-a.*  
 scold-always-TR.IND-3SG.3SG  
 ‘He/she always scolds him/her.’
- b. *Aata-mta qimugte-put Nunu-lar-a-a.*

father-1PL.ERG    dog-1PL.ABS    scold-always-TR.IND-3SG.3SG  
'Our father always scolds our dog.'

代わって、Haspelmath (2013: 212) と Siewierska (2011: 334) は、上でも述べたが、cross-indexing view という考えを提案する。従来の「一致」か「代名詞」かという理論的にどちらかに振れる分析の根本原因に、項の表示される文法的位置が1つの節内に1箇所であるという (functional bi-uniqueness; “only one syntactic argument per semantic referent in a clause” (Siewierska 2011:333); “the expectation that arguments should not be expressed twice” (Haspelmath 2013:212)) 考えが背景にあるからだという。しかし、Haspelmath (2013: 212) と Siewierska (2011: 334) によると、まず、その想定 of 理論的根拠は、1つの形式 (項) が複数の異なる指示物 (referent) を指示することによって生じる論理的な矛盾を防ぐためのものであって、1つの指示対象が2つの形式で協調して表示されることを妨げるものではないという。その上で、人称代名詞 (項名詞句)、人称接辞ともに単独で指示物 (referent) を指示することが出来、また、同じ節内でこの2つが生じることのできる言語では、片方が片方のコピーであるわけではなく、この2つが協調しあって、談話上の1つの指示物を照合しているという見方を Haspelmath (2013: 212) と Siewierska (2011: 334) は新たに類型論的な枠組みとして提案している。

1節の最後で述べたが、この考え方を Haspelmath は double-expression view と、Siewierska は double-indexation analysis とそれぞれ呼んでいる。本稿において、用語名を cross-indexing view と統一した理由は、上で述べたように、人称形式 (personal forms) は人称代名詞、人称接辞に関わらず、(i) 独立して指示物を指示できると仮定されていること、そして、(ii) 2つの形式は、「一致」の理論で想定されているような非対称的な関係でないこと、最後に (iii) (次節で確認するように、) 項名詞句と人称接辞は (同一の) 対象物の指示に関して相互補完的な機能を果たしていると考えられるからである。

### 3. Cross-Indexing View からみた中央アラスカ・ユピック語の特徴

この Cross-Indexing View に基づく人称接辞の考え方は、先にも触れたが、通言語的に最も多く観察されるタイプの (4) を理論的な例外として、あるいは、余分な理論的構築物を仮定せずに説明できる点において大変魅力的である。一方で、Haspelmath (2013) と Siewierska (2011) においてほとんど議論されていないことは、そのような見方を通言語的に仮定した場合、では、個別言語の分析にどのような利点をもたらすのかということである。本節では、3.1 節で CAY の一致現象、特に、項名詞句と人称接辞による (同一の) 対象物の指示に関する相互補完的な機能を観察することで、Cross-Indexing View という通言語的概念が個別言語の理解を深めるものになることを示す。そして、3.2 節では、CAY の一見複雑に見える場所格の解釈にも Cross-Indexing View という考えが応用できる可能性があることを指摘する。この考察の意図は、Cross-Indexing View という認知的原理が項名詞句と動詞の人称接辞との間で妥当なものとして機能するのであれば、その局所的な関係を超えても機能しているはずであると考えるからである。(CAY の代表的な記述文法書に Jacobson (1995) 及び、Miyooka (2012) がある。CAY の人称接辞の指示性 (referentiality) を扱った論考に Mithun (2003) があり、エスキモー諸語全体にわたる人称接辞の特徴を議論したものに Fortescue (1995) がある。CAY の詳しい文法等の情報はこれらの参考文献を是非参照されたい ((Tamura (2019) により詳しい文献情報がある)。また本論文における CAY の例は CAY 母語話者の Caan Topetlook 氏の

協力により得たものである。)

### 3.1. Cross-Indexing View からみた CAY の一致現象

では、Cross-Indexing View を個別言語の記述に取り入れていくことの利点を考察していくことにしよう。上の例文 (8:下に再掲) で示したように、CAY は (4) と同じ Cross-Indexes の特徴を示すことを確認されたい。(8a) にあるように、*Nunu-lar-a-a* という人称接辞を伴う動詞1つで、‘He/she always scolds him/her.’ という意味を表す文が成立し、また、(8b) のように、*Nunu-lar-a-a* は、具体的な項名詞句を伴って文を作ることも出来る (かなり強調するコンテキストを除いて、代名詞通常は用いられず、コンテキストで指示対象物が分かっている場合、(8a) の表現が最も自然な発話となる)。

(8) CAY (Caan Topetlook, a speaker) (=再掲)

a. *Nunu-lar-a-a.*

scold-always-TR.IND-3SG.3SG

‘He/she always scolds him/her.’

b. *Aata-mta qimugte-put Nunu-lar-a-a.*

father-1PL.ERG dog-1PL.ABS scold-always-TR.IND-3SG.3SG

‘Our father always scolds our dog.’

CAY の文法の特徴として、他動詞の場合、動詞に A 項と O 項の人称・数の情報が義務的に表示され (e.g. *-a* (3SG.3SG) in (8)), また自動詞の場合は、(9) のように S 項の人称・数の情報が動詞に人称接辞として義務的に付加される必要がある。(9) において、主語 (S 項) の数と動詞の人称接辞の数が同じであることを確認されたい。(エスキモー諸語において、数 (number) には、単数、双数、複数数の区別がある。また、文法性 (gender) の表示はない)。

(9) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

a. *Mikelnguq(∅) Quuyuni-u-q.*

child.3SG.ABS smile-INTR.IND-3SG

‘The child is smiling.’

b. *Mikelnguu-k Quuyuni-u-k.*

child-3DU.ABS smile-INTR.IND-3DU

‘The two children are smiling.’

c. *Mikelnguu-t Quuyuni-u-t.*

child-3PL.ABS smile-INTR.IND-3PL

‘The children are smiling.’

項名詞句の数と動詞の人称接辞によって表される数が「一致」するという特徴を踏まえて、さらに例文 (10) と (11) を比較してみよう。(10a) において、所有される「子供」が単数であり、それは、*-a(∅)* という人称接辞で表され、動詞もそれを受けて、「笑った」人が単数であることが示されている。同様に、(10b) では、所有される「子供」が複数であり、それは、*-i(∅)* という人称接辞で表され、動詞もそれを受けて、「笑った」人が複数であることが示されている。

(10) CAY (Caan Topetlook, a speaker; note: “irniar-“ indicates a biological child.)

- a. *Angute-m irniar-a(∅) quuyuni-u-q.*  
 man-3SG.GEN child-3SG.3SG.ABS smile-INTR.IND-3SG  
 ‘The man’s child is smiling.’
- b. *Angute-m irniar-i(∅) quuyuni-u-t.*  
 man-3SG.GEN child-3SG.3PL.ABS smile-INTR.IND-3PL  
 ‘The man’s children are smiling.’

一方、(11) において、(11a) では「笑った」人が単数で、(11b)では「笑った」人が複数で表示されており、解釈（訳）もその違いを表すものになっている。しかし、注目されたいのが、主語 (S 項) が (11a) と (11b) とで、*irnia(r)-puk* と、どちらも全く同じ形をしていることである。(紙幅の関係上、CAY における全ての人称・数の組み合わせを示すことが出来ないが Fortescue (1995) および、上で示した包括的な文法書を参照されたい。) つまり、項名詞句の *irnia(r)-puk* だけでは笑った子供の数が単数なのか複数なのかが特定できないケースが存在するのである。

(11) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

- a. *irnia(r)-puk quuyuni-u-q.*  
 child-1DU smile-INTR.IND-3SG  
 ‘Our child is smiling.’ (our = we, two)
- b. *irnia(r)-puk quuyuni-u-t.*  
 child-1DU smile-INTR.IND-PL  
 ‘Our children are smiling.’ (our = we, two)
- (c. *irnia(r)-egpuk quuyuni-u-k.*  
 child-1DU.3DU smile-INTR.IND-3DU  
 ‘Our two children are smiling.’)

さらに、例文 (12) と (13) を比べてみよう。(12) において、1 人称単数主語 (A 項) が単数の人に「会った」場合は、*-(∅)qa* という動詞人称接辞で、また、複数の人に「会った」場合、*-nka* という動詞人称接辞でその違いが示されている。これを合わせて目的語 (O 項) である「先生」が単数と複数でそれぞれマークされていることを確認されたい。

(12) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

- a. *Pairte-llru-a-(∅)qa imuna elitnaurista(∅) kipunvig-mi.*  
 see-PAST-TR.IND-1SG.3SG that.3SG.ABD teacher.3SG.ABS store-LOC  
 ‘I saw that teacher at the store.’
- b. *Pairte-llru-a-nka imukut elitnauriste-t kipunvig-mi.*  
 see-PAST-TR.IND-1SG.3SG that.3PL.ABS teacher-3PL.ABS store-LOC  
 ‘I saw these teachers at the store.’

では、(13) はどうであろうか。(13a) と (13b) において、意味が異なるにも関わらず、動

詞が全く同じ形をしていることに注目されたい。つまり、動詞 *Pairte-llru-a-put* のみでは、「会った」人の数が単数か複数かが判断できないのである。もちろん (13a) と (13b) の解釈の違いは目的語 (O 項) が単数でマークされているか、複数でマークされているかの違いによって生じている。

(13) CAY (Caan Topetlook, a speaker)

- a. *Pairte-llru-a-put*                      *imuna*                      *elitnaurista*                      *kipusvig-mi*.  
 see-PAST-TR.IND-1PL3SG    that.3SG.ABD    teacher.3SG.ABS    store-LOC  
 ‘We saw that teacher at the store.’
- b. *Pairte-llru-a-put*                      *imukut*                      *elitnauriste-t*                      *kipusvig-mi*.  
 see-PAST-TR.IND-1PL3PL    that.3PL.ABS    teacher-3PL.ABS    store-LOC  
 ‘We saw these teachers at the store.’

興味深い点は、先の (11) においては、解釈として得られる数の違いを明確にしたのが動詞の人称接辞であり、(13) において、数の違いを明確にしたのが項名詞句の数表示であるという事実である。

前節において、Haspelmath (2013) と Siewierska (2011) による Cross-Indexing View の特徴が項名詞句と動詞の人称接辞が各々独立して談話上の 1 つの指示物を指示し、照合する形で数が特定されることにあるということ述べた。(11) と (13) の例は、数の最終的な特定が項名詞句あるいは動詞の人称接辞、どちらからでもなされる可能性があることを示唆しており、両者が「文法的な一致」で議論されるような非対称的な関係、片方が片方をコピーする関係になっていないことを表していると考えられる。むしろ、項名詞句からの数の情報と動詞の人称接辞からの数の情報が照合される形で最終的な数の解釈が生じていると考えるほうが自然であると言える。まとめると、CAY において、前節 (3) のヨーロッパ言語的な「一致」という概念を項名詞句と人称接辞の関係に求めることは適切ではなく、Cross-Indexing View として考えるほうが適切であるとみなすことが出来る。例えば、Jacobson (1995) の記述文法書では「一致現象」の複雑な例として (11) や (13) の例が記述される傾向があるが、通言語的な枠組みとして提案された Cross-Indexing View つまり、名詞句 (項) を人称接辞は、それぞれ独立して指示することが出来、「一致」はその照合の結果であるという見方を取り入れた記述をする方がより分かりやすく CAY の人称接辞の特徴が捉えられると考えられる。

### 3.2. Cross-Indexing View からみた CAY の場所指示の特徴

Cross-Indexing View が 1 つの認知的な原理である場合、それは項名詞句と人称接辞の関係以外のところにも観察されるはずである。(恐らく様々な言語現象を動機づけていると考えられるが、) ここでは CAY によく観察される特徴的な場所表現を Cross-Indexing View の観点から考察してみたい。次の 2 つの例を考察されたい。

(14) CAY (Caan Topetlook, a speaker; Jacobson (1995:120, 143) の例を参考にして母語話者に確認したもの)

- a. *Nasaurlu-um*                      *nalke-llru-a*                      *una*                      *kayanguq*  
 girl-3SG.ERG    find-PAST-(TR.IND)-3Sg.3SG    this.ABS    egg.3SG.ABS  
 [*nunapig-mi*]                      [*navacuara-am*    *kelua-ni.*]



## 参考文献

- Atoyebi, Joseph Dele (2010) *A Reference Grammar of Oko*, Cologne, Rüdiger Köppe Verlag.
- Barlow, Michael (1988) *A Situated Theory of Agreement*, New York, Garland Press.
- Barlow, Michael (1999) "Agreement as a Discourse Phenomenon," *Folia Linguistica* 33(1-2), 187-210.
- Boeder, Winfried (2002) "Syntax and Morphology of Polysynthesis in the Georgian Verb," *Problems of Polysynthesis*, edited by Nicholas Evans and Hans-Jügen Sasse, 87-111, Berlin, Akademie Verlag.
- Corbett, Greville G. (2006) *Agreement*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory vol. 1: Methodology*, Oxford, Oxford University Press.
- England, Nora C. (1983) *A Grammar of Mam, a Mayan Language*, Austin, University of Texas Press.
- Fortescue, Michael (1995) "The historical source and typological position of ergativity in Eskimo languages," *Études/Inuit/Studies*, Vol. 19, No. 2, 61-75.
- Haspelmath, Martin (2013) "Argument Indexing: A Conceptual Framework for the Syntactic Status of Bound Person Pronoun," *Languages across Boundaries*, edited by Dik Bakker and Martin Haspelmath, 197-226, Berlin, Walter de Gruyter.
- Jacobson, Steven A. (1995) *A Practical Grammar of the Central Alaskan Yup'ik Eskimo Language*, Alaska Native Language Center, Fairbanks.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar vol.2: Descriptive Application*, Stanford, Stanford University Press.
- Langacker Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford, Oxford University Press.
- Levinson, Stephen C. (1996) "Language and Space," *Annual Review of Anthropology* 25, 353-382.
- Mithun, Marianne (2003) "Pronouns and Agreement: Information Status of Pronominal Affixes," *Transactions of the Philological Society* 101(2), 235-278.
- Miyaoaka, Osahito (2012) *A Grammar of Central Alaskan Yupik (CAY)*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Nichols, Johanna (1986) "Head-Marking and Dependent-Marking Grammar," *Language* 62:1, 56-119.
- Schultze-Berndt, Eva (2000) *Simple and Complex Verbs in Jaminjung: A Study of Event Categorization in an Australian Language*, Ph.D. Dissertation, Katholieke Universiteit Nijmegen.
- Shibatani, Masayoshi (2021; in press) "Language Typology," *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*, edited by Mark Aronoff, Oxford, Oxford University Press.
- Siewierska, Anna (1999) "From Anaphoric Pronoun to Grammatical Agreement Marker: Why Objects don't Make it," *Folia Linguistica* 33(1-2), 225-252.
- Siewierska, Anna (2011) "Person Marking," *The Handbook of Linguistic Typology*, edited by Jae Jung Song, 322-345, Oxford, Oxford University Press.
- Tamura, Yuki-Shige (2019) "Nominalization in Central Alaskan Yup'ik," *Nominalization in Languages of the Americas*, edited by Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani, and David W. Fleck, 273-300, Amsterdam, John Benjamins.
- Willie, Mary A. (1989) "Why there is nothing missing in Navajo relative clauses," *Athapaskan Linguistics: Current Perspectives on a Language Family*, edited by E.-D. Cook and K. Rice, 407-437, Berlin, Mouton de Gruyter.

# フランス語における擬態語および関連表現について

春木 仁孝

## 1. はじめに

一般にフランス語には擬態語は存在しない、あるいは存在しても僅かであるとされる。筆者は春木(2012)においてフランス語のオノマトペを考察する中で、現代フランス語に見られる擬態的と考えられる表現についても若干の考察を行なった<sup>1</sup>。そこで取り上げたのは、*une fille pétillante* 「活発な女の子」という表現である。この *pétillant(e)* という形容詞は

(1) *pétiller* 「(薪が) パチパチはぜる、(発泡性の飲み物が) 泡立つ」

という動詞の現在分詞に由来するものである。もとの動詞は、フランス語に数多く存在するオノマトペ効果を持つ部分を内包する動詞である。この場合は擬音語的なオノマトペ効果を持っていると考えられる。シャンパンやサイダー類が泡立つときには日本語では「シュワー」という音で表現するが、細かい泡が次々とはぜる音はプチプチやパチパチとも表現できる。シュワーという表現はそれらの細かい音を全体的・総合的に捉えたものと言える。いずれにしろ、そのような音と共に泡がはじける様子、さらには薪がパチパチはぜる様子には連続的で活発な動きが観察される。そこからこの動詞の現在分詞に由来する形容詞 *pétillant* [petijã] は「パチパチはぜる、キラキラ輝く」といった意味から、人を形容するときには「元気のよい、はつらつとした、才気溢れる」という意味になる。たとえば *une fille pétillante* という表現があるが、これはまさに「ピチピチとした(若い)女性」と訳せる<sup>2</sup>。薪がパチパチはぜる様子や泡が盛んにピチピチ、パチパチとはじけている様子が、活気のある様子として人の性格という領域に転移されていると分析できる。つまり擬音語的な意味が擬態語的な領域へと拡張されているのである。

このような例を見るとフランス語にも確かに擬態語が存在していることが分かる。本稿ではフランス語のオノマトペの中の擬態語および擬態語的表現と、それらに関連して準オノマトペ的表現とでも呼べる表現について若干の考察を行ないたい。

## 2. 様々な擬態語

### 2. 1. 擬音語から擬態語へ

上で見た *pétillant* のように本来擬音語であった表現が、その音を伴う現象の様態へと意味を拡張させて擬態語が生まれるという現象は普遍的なものであろう。そのように表現の適用領域が拡張される際に、もともとの擬音語的な側面がある程度残る場合から純粋に様態だけを表わす場合まで、程度に違いがあるように思われる。*une fille pétillante* という表現には、燃えている薪や発泡性の飲み物の泡の活発な動きだけでなくそれらの音のイメー

<sup>1</sup> 以下、例(16)までに挙げた例と説明には春木(2012)の内容と重複するところがあるが、当該論文はウェブのみで閲覧可能であり、リンクの変更などもあり今後もアクセスに不安があるので、あえて繰り返しを厭わなかった。

<sup>2</sup> いくつかの仏和辞典では *un esprit pétillant* が「溢れる才気；才気煥発な人」などと訳されているが、*une fille pétillante* の場合は「活発な、はつらつとした」という訳がふさわしいと考えられる。

ジが多少とも重なっていると思われる。一方、*un œil pétillant*「キラキラ輝く眼」や *un ciel pétillant d'étoiles*「星でキラキラ輝く空」といった表現には音のイメージは希薄であり、視覚的な効果を表現しており、完全に擬態語的な表現であると考えられる。つまり、ここには先ず擬音語が比喩的に擬態語的に用いられ、さらに意味の拡張が進むとより純粋な擬態語になるという過程が想定できる。しかし擬態語そのものが少ないフランス語では、擬音語に由来する擬態語もあまり多くは見られない。これまでも何度か取り上げた

(2) *froufrouter* 「(衣服・葉などが) 軽く音をたてる、サラサラと音をたてる」

という動詞から派生した名詞 *froufrou* には「サラサラ／カサカサ (という音)」という意味以外に「リボン・レースなどの婦人服の飾り、フリル」という意味があるが、これなどももともとは「サラサラという音をたてる飾り」という意味から「(そのような音をたてそうな) ひらひらとした飾り」という様態的な意味に拡張されており、擬態語的な名詞と言える。やはり *f* や *r*、(そして *s*)の音を含む

(3) *frémir* 「震える、軽い音をたてて揺れる」(名詞：*frémissement*)

(4) *frissonner* 「(身体が) 震える、(ものが) 揺れる；かすかな音をたてる、そよぐ、ざわめく、せせらぐ」

などの動詞およびその派生語も、「(寒さや熱などが原因の) 身体の震え」を表わす場合には擬音的側面が捨象されて、日本語の「ブルブル震える」などと同様の擬態語的表現になっていると言える。ただこれらの表現が音を表わしている場合も、同時に様態をも表わしていると考えられることも多く、以下の様な例におけるように擬音語的側面と擬態語的側面を切り離すことができない場合も多い。

(5) *Le feuillage frémit au vent.* 「葉むらが風に (サラサラと) そよいでいる」

(6) *Les feuilles frissonnent sous la brise.* 「そよ風に木の葉が (サラサラと) そよいでいる」

## 2. 2. 本来的に擬態語と思われる場合

次に本来擬音語ではない語彙で、擬態語的な意味を持つと考えられる例を挙げてみよう。*branler*「グラグラする、揺れる」という動詞は語源的にはオノマトペではないようだが、日本語では「グラグラする」のように擬態語が対応する。一方、フランス語の *branler*「揺れる」という動詞そのものにオノマトペ効果を認めるのは難しい。しかし、現在分詞に由来する形容詞を用いた *un cou branlant*「グラグラ揺れる首」のような表現には破裂音と流音に鼻母音[ã]の繰り返しが加わって、まさに日本語の「グラグラ」に対応するようなオノマトペ効果を感じ取れるのではないだろうか。何らかの揺れを表わす表現にはある程度の擬態語的な効果を感じ取れるものが多い。たとえば *balancer*「揺り動かす、揺する」、*balançoire*「ブランコ」などの語にも同様の効果があるとは言えないだろうか。「揺れる」を表わす *trembler* や *trembloter*、さらには *osciller*, *vaciller* にも幾分かのおノマトペ効果が認められる。また *marcher les bras ballant*「腕をぶらぶらさせながら歩く」なども同様である。

このほかに擬態語的な語として春木(2012)では以下のようなものを挙げた。

(7) *zigzaguer* 「ジグザグに進む」、(8) *briller* 「キラキラ輝く」、(9) *piquer* 「チクッと刺す」、

Ex. *Ça pique*. 「チクチクする」、(10) *chatouiller* 「くすぐる、チクチクする」、(11) *gratter* 「ひっかく、チクチクする」、(12) *tituber* 「ふらつく、よろめく」

*gratter* は「(固い物を) (ガリガリ) ひっかく、削る」という意味の場合は擬音語でもあり擬態語でもあるが、*Ça me gratte ce pull*. 「このセーターはチクチクする」のような表現では触覚的な様態を表わす擬態語である。

### 2. 3. Enckell et Rézeau(2003)に見られる擬態語

ここまでに見てきた表現は、動詞、そして現在分詞から派生した形容詞であった。それはフランス語においてはオノマトペ効果を持つ要素が動詞の中に取り込まれていることが多いからである。もちろんフランス語にも独立して用いられるオノマトペは多くあるが、それらは副詞的な性格を持つ日本語のオノマトペとは違って、間投詞的であり、日本語におけるように文の副詞的構成要素として用いることは難しい<sup>3</sup>。そのような間投詞的オノマトペもほとんどが擬音語であるが、わずかに擬態語的なものも存在している。以下に挙げたのはオノマトペの辞書である Enckell et Rézeau(2003) の収録語の中で筆者が気付いた擬態語的な説明がついたものである。フランス語の定義はその辞書のものである。

(13) *gla gla* = 寒い感じを表わす *marque une sensation de froid* 「ブルブル、ガタガタ」

(14) *hop* = 跳ぶこと、登ること、急激な動作を表わす *marque un élan, un saut, une escalade, un geste rapide* 「エイッ、ヤッ、パッ」

(15) *prrt, prout* = 急に行ってしまうこと、急に姿を消すことを表わす *marque un départ ou une disparition rapide* 「ドロン、パッ」 / 無関心、軽蔑、拒否を表わす *pour marquer l'indifférence, le mépris, le refus* 「フン」

(16) *miam-miam* = 美味しいと思っていることを表わす *marque une appréciation gustative favorable*<sup>4</sup>

(14)(15)のような例とも関連するが、フランス語には状況の突然の変化を表わす一連の擬態語が存在している。たとえば *plop* は本来的には瞬間的な軽い音を表わす擬音語だが、状況の突然の変化を表わして用いられることがある。急に人が亡くなったり姿を消したりした場合や、人が突然態度を変えたような時に用いられる。

(17) *Puis le sommelier (...) déboucha la seconde bouteille — Plop!* (Enckell et Rézeau (2003)) 「それからソムリエが二本目のボトルを開けた。ポン！」

(18) *Un soir il était mort, plop, comme ça, d'un coup, sans prévenir.* (Enckell et Rézeau(2003)の例を一部改変)

「ある晩、彼は亡くなってしまった、ぽっくりと、突然、何の前触れも無く」

<sup>3</sup> フランス語のオノマトペは文中においても間投詞的に用いられることが多いが、主語や目的語、あるいは前置詞と共に文の構成要素として名詞的に用いられることも少なくない。ただし、その際のオノマトペの「名詞性」の程度については様々な問題がある。また前置詞なしで副詞的に用いられている例も少数ながら見つかる。フランス語におけるオノマトペの構文要素としての振る舞いとその問題については春木(2013, 2020)を参照されたい。

<sup>4</sup> この語には擬態語的な側面と共に擬音語的な側面もあると考えられる。いずれにしろ、日本語にはびったりと対応するオノマトペはない。パクパク、モグモグ、ムシャムシャなどは食べている様子を表わすのであって、美味しく思っていることを表わすことに特化している表現ではない。

plop と同様に他にも瞬間的な音を表わす擬音語が、急激な変化を表わして擬態語的に用いられることがフランス語ではよくある。石野(2015)でも引用されているが、Enckell et Rézeau(2003)では解説部分において、「音とその抽象化」bruit et abstraction という項目を立てて本来は擬音語であるものが音以外のものを表わすために用いられる場合を挙げている。「痛み」を表わす場合など擬態語的でないものを除くと以下のような例が挙げられている。

突然の消失 (disparition soudaine) : fft, pcht, pff, pft, (piouf, vrip).

事態の素早さ、事態の突然性 (rapidité ou soudaineté d'un procès) : badaboum, boum, clac, clinc, cloc, crac, cric crac, flop, hop, paf, pan, pif paf, plaf, ploc, plof, plop, pof, pouf, poum, prr, ran, schlac, schlaf, tac, tchac, tchiac, toc, vlam, vlan, vrrt, wham, zip, zoum, zoup, (djinn, fchiaff, froumm, zioupe, zac, zit). [poc, plouf, pst]<sup>5</sup>

このリストには(14)の hop が含まれているが、hop には音を表わす用法はないので「この一覧からは除外すべきである。一方、(15)として挙げた prrt, prout の意味は上の一連の語と共通しているが、Enckell et Rézeau(2003)による限りこれらの語に音を表わす用法はないので、この2語が上のリストに含まれていないのは妥当である。

Enckell et Rézeau(2003)が解説部分において「音とその抽象化」という項目のもとに記しているのは、「攻撃」agressivité (grr など3語)、「痛み」douleur (aïe など3語)、「反撃」riposte (tac, toc の2語)を除けば、その大半が上に挙げた「突然の消失」「事態の素早さ、事態の突然性」を表わすものである。これらは「事態の突然性」として一つのカテゴリーにまとめることができる。翻って日本語ではこの意味に対応するオノマトペを考えると、パツ、サツ、ドローン、ヒラリ、ハラリ、ストーンなどがおもい浮かぶが、ヒラリ以下は擬音語的な側面が強いように思われる。いずれにしろ、事態の突然の変化を表わすフランス語のオノマトペの豊かさは際立っている。一般に擬態語が少ないとされるフランス語においてはこの事実は奇異に思える。ただここで問題なのは、日本語の擬態語といわれる表現は基本的には具体的な様態を表わしているのに対して、上のフランス語の一連の語が表わしているのは抽象的な状況であるという点である。まさに Enckell et Rézeau(2003)が解説で用いている「音と抽象化」という表現通り、「事態の突然の生起・変化」というのは抽象的に捉えられた状況である。その意味で上のフランス語の一連の表現は擬態語というよりも擬況語とでも言うべきものであり、日本語の擬態語とは性格を異にすると云わざるを得ない。

もちろん日本語にも一定の状況に対するオノマトペはあるが、それらはたとえば、ガヤガヤ、ザワザワ「騒がしさ」、シーン「静けさ」、ゴチャゴチャ「混雑、混乱」のように具体的な状況に対応している。このように考えると、擬況語的なものは一定数存在するものの、やはりフランス語には日本語のようなタイプの擬態語は少ないと考えられる。

因みに春木(2020)で考察した「et+オノマトペ」という構文も「事態の突然の展開」を表わしていたが、この構文に現われるオノマトペには本来擬音語である clac, bing, vlan, boum

<sup>5</sup> piouf および djinn 以下の( )内ものは解説部分に実例が挙げられているものの、辞書の項目としては立てられていない。書き手の個人的なバリエーションと考えられる。なお、他にこの辞書の項目で擬音語が拡張によって事態の突然性を表わすことが記されているにもかかわらず一覧に抜けているもので筆者が気付いたものを[ ]で補った。

などもあるが、上で見た hop の頻度も高い。また擬音語が使われている場合も擬音と「状況の突然の展開」を共に表わしており、「et+オノマトペ」という構文は擬況的な表現であると考えられる。たとえば以下の例ではもともと「爆発や物の落下による音」を表わすオノマトペの boum が音とは関係なく完全に比喩的に状況に関して用いられている。

(19) J'ai ouvert l'œil *et boum*, tout m'est apparu.

(Marie Darrieussecq, *Notre vie dans les forêts*. 2017 : 11)

「私は眼を開けた、するとバーン、一気にすべてが私の眼に入ってきた」

### 3. 擬態語的表現の検討

フランス語の擬態語については石野(2015)が多くの表現を挙げているので<sup>6</sup>、それを参考にさらに検討してみよう。石野氏は擬音語が擬態語に移行したものとして、以下を挙げる。

(20) blabla, charivari, couac, guili(-)guili, pioupiou, tagada, tintin, toc, tralala, zinzin, tsoin-tsoin(tsouin-tsouin),

最初に確認しておくが、石野氏が擬態語として挙げる場合のほとんどが名詞であり、擬態語と言われて一般に思い浮かべる類の表現とは異なっている。この点については後で考えたい。いずれにしろ(20)の表現が擬態語と考えられるかどうか少し検討してみよう。

たとえば couac は調子はずれの音を表わす擬音語として間投詞的に用いられるが、そこから調子外れの音、不協的な音を指す名詞として用いられ、さらに「不一致、不調和」という意味の名詞として用いられる。何らかの音を表わす名詞として用いられる場合は擬音語的な名詞ということができるが、「不一致、不調和」という意味の名詞としての couac を擬態語ということができるだろうか。これは「不協的な音」という意味が比喩的に状況に適用されているだけであると考えたべきではないだろうか。日本語では、「ギクシャクとした関係」のように名詞部分とオノマトペの部分が別々になるのでオノマトペであるかどうかを判定しやすい。一方、フランス語では動詞の場合もオノマトペが動詞の中に含まれていたように、名詞の場合もオノマトペそのものが名詞になるので、何らかの音に言及している擬音語の場合はよいとしても、擬態語かどうかを判定するにはいろいろと問題がある。

元々はひよこを意味する pioupiou は明らかにオノマトペ起源であるが、現在は「(若い)兵卒、単なる兵卒」を意味する。日本語のひよこもオノマトペ起源であり、また未熟な人間の意味でも使われる点はフランス語の pioupiou と似ている。しかし日本語で未熟な人を指して「ひよこ」という言葉を使ったときにこれを擬態語的表現と考えることはないだろう。pioupiou はあくまでも擬音語的な語の比喩的な意味の拡張と考えるべきである。

元々は鐘や鈴の音を表わしていた tin tin は名詞、間投詞として「何もないこと、からっけつであること」を表わすが、これがどうして擬態語的表現になるのか。何らかの要求のために鈴を鳴らしても無駄であったところから名詞・間投詞の意味が出来たのではという

<sup>6</sup> 石野(2015)はフランス語の語彙の諸相について広く解説したものであって、個々の表現について深く論究したものではない。また、ある表現を擬態語とする根拠をいちいち述べてはいない。ただ擬態語的な表現をまとめて挙げている数少ない文献であり、私が検討したい表現と多くが重なるので、擬態語を考察する出発点とさせていただいた。

説明もあるが、もしそうならば擬音語の比喩的用法になる。

物がぶつかったときのコツコツという音を表わすオノマトペ **toc** には名詞としては「偽物、まがい物」、形容詞としては「偽物の、まがい物の」という意味がある。これは昔から一部の方言でいかさまや策略を何かを軽く叩くことを意味する表現で表わしたことによる。そうだとするとこれらの意味は擬音語としての用法の延長線上にあるのではないだろうか。

**zinzin** 「エンジンなど騒々しい音→(名詞) 頭が少しおかしい人、(形容詞) 頭が少しおかしい」については擬音語的な意味と名詞や形容詞としての用法との関連が明瞭ではなく、いずれにしる擬態語と認定する根拠が判然としない。

不信・喜びを表わす間投詞である **tralala** については起源的には歌のリフレインから来ているようだが、そこから不信や喜びを表わす背景的音楽として間投詞的に使われているかと推測される。これはオノマトペ起源の間投詞であるが、「派手な装飾、華美; 気取り」という名詞用法への拡張の道筋はよく分からない。擬態語的と言われても納得し難い。

**blabla** 「おしゃべり」、**charivari** 「大騒ぎ」は擬態語ではなく、やや比喩的に使われているものの、あくまでも擬音語であると考えられる。

(20)の中で擬態語的と思われるのは **tsointsoin** である。「ちゃんちゃん(歌の中での楽器による合いの手) → 念入りな」は合いの手から評価・称賛の意味が派生して、また音が近い **soin** 「入念さ」の影響もあって「念入りな」という意味が生まれたと説明される。

さらに擬態語と考えられるのは「馬の駆け足の音」を表わす **tagada** の以下のような用法である。以下は石野氏が引く例である。

(21) **Le mois d'août, tagada-tagada, s'achève.**

「8月 馬の駆け足のようにあつという間に終わる」

この例では **tagada-tagada** が間投詞として文中に挿入されているが、副詞的に用いられる日本語のオノマトペと同じような機能を果たしている。石野氏の訳では「馬の駆け足のように」となっているが、「パカパカと駆ける馬のように」ということで擬音語的な側面も残しつつもそのような音をたてながら疾走する馬の速さへと意味の焦点が移行しているということで一応擬態語的表現と考えることができるだろう。

**guili(-)guili** については、たとえば **faire guili(-)guili à qn.** 「...にこちょこちょする」のような名詞用法もあるが、くすぐる時に言う言葉であり、これはむしろ擬音語である。

以上、石野氏が擬音語起源の擬態語として挙げた表現を検討した。おそらく石野氏は形態的にオノマトペ的であって、元は擬音語であるものが音以外の領域の意味を表わすようになった表現を擬態語的とみなしているのかと考えられる。

さらに石野氏は擬音語に起源をもたない本来的な擬態語として以下の表現を挙げる。

(22) **cahin-caha** [kaɛkaa] 「どうかこうにか、かろうじて」; **clopin-clopant** [klɔpɛklɔpɑ̃] 「足を引きずって、えっちらおっちら」; **chouchou, -te** (名詞) 「お気に入り、秘蔵っ子」(cf. **chouchouter** (他動詞) 「...を甘やかす、ちやほやする」、**chouchoutage** (n.m.) **chouchouter** の名詞); **cracra** 「垢だらけの」; **flafla** (n.m.) 「見せびらかし」; **fric-frac**

(n.m.) 「押し込み強盗」; **gnangnan**[ɲɑ̃ɲɑ̃] (形容詞) 「ぐちっぽい, 軟弱な, [物語など] お涙ちょうだいの, (名詞) ぐちっぽい人, 軟弱な人」; **méli-mélo** (n.m.) 「まぜこぜ」; **pêle-mêle** (n.m.) 「ごちゃまぜのもの, (副詞) ごちゃごちゃ (に), 乱雑に, 雑然と」; **ric-rac** (副詞) 「きっちり, ぴったり; ぎりぎり」; **tohu-bohu** [toyboy] (n.m.) 「(天地創造以前の) 混沌, 大騒動, 大混乱; 喧騒」; **bataclan** (n.m.) 「雑多なもの, ごたごた」; **chochette** (n.f.) 「気取った女; 女性っぽい男性, (形容詞) 気取った」; **nanan** (n.m.) 「砂糖菓子, 甘いもの」; **perlimpinpin** [perlɛ̃pɛ̃pɛ̃] (n.m.) 「いかさま, いんちき, 絵空事」  
 上記の語は大半が繰り返しあるいは部分的繰り返しを含み、形態的にはオノマトペらしい様相を示している。先ず **clopin-clopant** の語根は「足が不自由な, 不揃いの」という意味のラテン語の語根、そして古期フランス語の動詞 **cloper** に遡ることが出来るが<sup>7</sup>、接尾辞と繰り返しを伴うこの形は明らかにひょこひょこ足を引きずって歩く様子を擬音語的に表わしていると考えられる。**gnangnan** については前にあげた咀嚼音を表わす **miam-miam** に似て元はぶつぶつと文句を言う様子を表わす擬音語である。また **bataclan** も起源的には物の落下音を表わす擬音語だったとされる。**flafla** は太鼓の 2 拍子打ちを表わすオノマトペ起源の **fla** の反復形だとすると元は擬音語になる<sup>8</sup>。以上の表現については(20)の擬音語が擬態語へと拡張されたケースに含むべきものである。

**perlimpinpin** については魔法の呪文をそれらしく真似たものではないかとされ、その場合は一種の擬音語になるが、確かなところは分からない<sup>9</sup>。**nanan** も幼児語によく見られる(擬音的?) オノマトペ的要素の **nan** からとされるが、**nanan** そのものが擬音語であったかどうかは定かではない。これらの 2 語については不確かな点があるが、いずれにしろ(22)のうち以上を除く表現はオノマトペ以外の語源を持っている。

「お気に入り, 秘蔵っ子」を意味する名詞 **chouchou** は反復形式でオノマトペ的な雰囲気を持っているが、これは「キャベツ」を意味する **chou** が所有形容詞を付けた呼びかけ語として恋人や子供に対して「愛しい人, 可愛い子」の意味で用いられる用法からのものであり、オノマトペではない。なお **chochette** は意味から **chouchou** や形容詞 **chouchouté** に関係づける説と、**cocotte** 「娼婦」(起源は鶏の鳴き声でオノマトペ) の変形と考える説とがあり、またオノマトペ動詞 **chuchoter** 「ささやく」の影響もあるとされる。**cocotte** 説を取ると遠く起源的には擬音語になるが、**chochette** そのものには擬音性はない。

**cahin-caha** は **cahot** 「でこぼこ道, (でこぼこ道を行く車の) 揺れ」, **cahoter** 「揺れる/揺り動かす」などの語と関係するようである(ラテン語起源説は取らない)が、**cahin-caha** という形はオノマトペと見なしていいだろう。**pêle-mêle** は古期フランス語の **mesler** 「混ぜる」の命令形の反復による表現で、語頭の繰り返しを避けたものであり、様々なヴァリ

<sup>7</sup> このラテン語の語根は人名の **Claudius** や **Claude**, **Claudia** などにも含まれている。また動詞 **cloper** は現代フランス語では接尾辞を伴う派生形の **clopiner** という形で残っている。

<sup>8</sup> **flafla** の意味には動詞 **flatter** 「へつらう」の語根の影響も認められるとされる。

<sup>9</sup> **Barbara** のシャンソンに **Perlimpinpin** というタイトルのものがあるが、これは **Barbara** が子供時代に住んでいた地域の公園内の地域住民達の共同管理による庭園の名前にちなんでいる。子供に取ってはわくわくさせる名付けである。

アントが存在したが *méli-mélo* もその一つである<sup>10</sup>。これらは例外的に名詞の場合も含めて擬態語と考えるとよいように思われる。

*ric-rac* は副詞として「きっちり、ぴったり」という意味を表わす（例：*J'ai payé ric-rac le loyer de ce mois.* 「私は今月の家賃をきっちり払った」）<sup>11</sup>。母音の異なる二つの要素を重ねているところなど、形態的にはオノマトペ的である。問題は、はたして *ric-rac* が「きっちりそれだけ」という意味と感覚的につながるのかどうかということである。語原的につながる *riquiri* 「ちっぽけな、粗末な」という性数無変化の形容詞もあるので、*[rik]* という音がフランス人の感覚の中で「小さいこと、少ないこと」を喚起するのかもしれない。

*fric-frac* はもともとは二つの別々の側を叩いた音を表わしていたようだが、「押し込み強盗」への意味の拡張はよく分からない。「お金」を意味する *fric* への連想はあつただろう。

*cracra* は *huile cracra* 「とても汚れた油」のように形容詞として用いられる。*cracra* は *crasseux* 「垢だらけの、ひどく汚い」という形容詞の第一音節を繰り返したもので、繰り返しと性数無変化という点でオノマトペ的な性格も見えるが<sup>12</sup>、この語に「ひどく汚れた」という感じを持つのはやはり元の語 *crasseux* を喚起させるからである。ただ、同じ意味のよりくだけた形として *cradingue*, *cradoque*, *crado*, *crade* など一連の語があり、*cra[kra]* という音が「汚さ」を喚起しやすいということはあるだろう。結果的に *cracra* という語の響きそのものにフランス語話者に汚さを感覚的に喚起させるものがあるのかもしれない。

*tohu-bohu* は学術的には旧約聖書で用いられた語源のヘブライ語の意味である「(天地創造以前の) 混沌」を表わすが、日常語としては「大騒動、喧噪、大混乱」を意味していて、どちらかと言うと喧噪のような音に重点がある。もしもオノマトペと認定するとしても、擬音語的側面の強いオノマトペ名詞ということになる。

#### 4. 擬態語の問題点

主として石野(2015)が擬態語として挙げる表現を検討してきたが、擬態語を考える上で二つ問題点がある。一つは石野氏が擬態語として挙げる表現の多くが名詞であるという点に関連する。日本語話者にとって、オノマトペは単独で間投詞的に用いられったり、「ピカピカの新車」のように形容詞としても用いられるが、基本は文中で副詞的に用いられる表現である。春木(2017)で多少触れたように、ガラガラ (赤ん坊のおもちゃ)、プチプチ (気泡梱包材) のようにオノマトペ、それも基本的には擬音語がそのまま名詞になったオノマトペ名詞のようなものもあるが、それらは石野氏が擬態語として挙げるたとえば *toc* 「偽物」、*fric-frac* 「押し込み強盗」のような名詞とは性格が違っている。

この問題は擬態語に関する二つ目の問題とも密接に関わってくる。それはどのような基

<sup>10</sup> 英語に同じ意味の *mishmash* という表現があるが、これも古英語の混ぜるという動詞から来ているのは興味深い。

<sup>11</sup> *ric et rac*, *ric-à-rac* という形もある。古くは *ric-à-ric*, *au ric* などの形も存在した。また意味は「ぎりぎりそれだけ」「必要最小限」というようなニュアンスが強い。

<sup>12</sup> 繰り返しはこの語がもともと幼児語であるからだと思われる。男性女性に関して無変化であるのも *crasseux* の最初の音節を繰り返して作られた非正規語的な性格によると考えることもできる。

準である語を擬態語と認定することが出来るのかという問題である。擬音語においては表現形式（シニフィアン）と意味内容（シニフィエ）の関係は100%恣意的なものではなく、各言語によって慣習化されてるとは言え一定のつながりを認めることができる。これに対して擬態語の場合は、当該の言語の中で一般の語彙とは異なる特定の言語形式、たとえば繰り返しや母音の一部、子音の一部の変化を伴う反復形式を取るなどその言語のオノマトペに特有の形式を取り、かつ明らかに何らかの意味を喚起する語根などが含まれていないことといった条件が考えられる<sup>13</sup>。擬態語における表現形式と意味内容の関係は長年の使用を通じてその言語の中で慣習化されたものであるが、やはり音のレベルで感覚的に訴えるものがあることが多いと思われる。それは擬音語の場合にも見られるように多くの言語で同じような感覚を喚起する場合と、当該の言語の音システムの中である感覚を喚起する場合とがあるのではないだろうか。たとえば日本語で「胃がきりきりと痛む」と言った場合、破裂音[k]と狭母音[i]があることで鋭さが喚起されて鋭い痛みを表わしていることが日本語話者にはよく分かる。しかし、一般に非ネイティブにはある言語の擬態語が感覚的に喚起するものを感じ取るのは容易ではない場合も多い。

石野氏が擬態語として挙げる名詞については感覚的な意味を表わしているわけでもなく、「偽物」「押し込み強盗」のような一般的な意味を表わしており、その点からも一部を除きこれらの名詞を擬態語と認定するには無理がある。前に見たように擬音語を用いた名詞はいろいろとあり、オノマトペ名詞とでも呼べるが、擬態語を用いた名詞はたとえ存在しても数少ないことが予想される。たとえばひらひらする飾りを「ひらひら」と呼んだとするとこれは擬態語的名詞ということになるが、そのような例は殆ど思い浮かばない。

以上のように考えると石野氏が挙げる(20)(22)の表現のうち、擬態語と考えてもいいのは副詞あるいは形容詞として用いられる *clopin-clopat*, *tsoin-tsoin*, *tagada*, *cahin-caha*, *pèle-mêle*, *ric-rac* ぐらいに限られるのではないかと思われる。

## 5. まとめと補足

フランス語では独立した表現としてのオノマトペも数多く、また筆者がこれまでに見てきたように、動詞の中に取り込まれた形でのオノマトペも多い。しかし、それらは殆どが擬音語である。本稿でも見たように、フランス語にはやはり擬態語は非常に少ないと考えられる。特に石野氏の例に見られるような名詞を擬態語とすることには問題がある。

一方、フランス語には事態の突然性や事態の突然の展開を表わす擬況語は比較的たくさん存在するが、これは事態のありようを感覚的に表現する擬態語とは性格を異にする。

ところでフランス語には形式上、オノマトペに似ていたり、通常の音型とはやや異なる以下の様な表現が存在する。

(23) *brouhaha*[bruaa] (名詞)「ざわめき、どよめき」; *cohue*[kɔy]「騒々しい群衆、雑踏」;  
*trictrac* (名詞)「西洋双六」(サイコロの音から); *bric-à-brac* (名詞)「骨董、がらくた

<sup>13</sup> もしこのように考えるならば、前に挙げた *cracra* は擬態語からは除外されることになる。

の山」；*de bric et de broc* (副詞)「行き当たりばつりに」(*bric et broc* (形容詞))；*pile-poil* (副詞)「ちょうどぴつりに、まさにその通り」；*dare-dare* (副詞)「大急ぎで」；*micmac* (名詞)「混乱、陰謀 悪巧み」；*sac et ressac* (名詞)「寄せ波引き波」；*pique-nique* (名詞)「ピクニック」；*en catimini* (副詞)「こっそりと」；*illico (presto)* (副詞)「すぐに」、*couci-couça*[*kusikusa*]「どうにかこうにか、まあまあ」(cf. *comme ci comme ça*)ここに *peu ou prou* (副詞)「多かれ少なかれ」、*sain et sauf*「無事に」(そして上に挙げた *pile-poil*) のような頭韻を踏んだ一部の熟語を加えてもよいだろう。これらの表現のうち *trictac*, *bric-à-brac*, *de bric et de broc*, *bric et broc* のように語源的にはオノマトペ起源のものもあるが、その他はヘブライ語起源(*brouhaha*)であったり、ブルトン語起源(*cohue*)であったり、ラテン語からの借用(*illico*、なお *presto* はイタリア語からの借用)であったり、ピカルディ方言から(*en catimini*)であったり<sup>14</sup>、スペイン語からの敷き写し(*sac et ressac*)であったり、イタリア語起源(*couci-couça*)であったり、中世オランダ語起源(*micmac*)であったりと様々であるが、いずれにしろこれらの表現には音のレベルでの「遊び」が感じられる。石野氏が挙げていたものも含めてこれらの表現の大半が口語的であり、オノマトペ同様に感覚的で擬音的、擬態的な効果を幾分かは感じさせる表現も多い。

擬態語についてその基準やひいては認定の仕方などを厳密に考えることも重要であるが、それと同時に(20)(22)(23)に挙げた様な一連の表現を、特に話し言葉に見られる言葉の「遊び」、そしてオノマトペも含めて特定の音や音の組み合わせによる表現性という観点から捉え直してみることも、人間の言語活動のあり方を考える上で意味があると思われる。

#### [参考文献]

- 石野好一 (2015)：「フランス語を知る、ことばを考える 一語彙の諸相一」『ことばの世界』6：41-69 (愛知県立大学高等言語教育研究所年報)。
- 春木仁孝 (2012)：「フランス語におけるオノマトペ効果について」『川口順二教授退任記念論文集』：25-38。(ウェブ出版：<https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-01511628> および冊子体の私家版、なお URL は当初のものから変更されているので注意)。
- 春木仁孝 (2013)：「フランス語のオノマトペ ―オノマトペの名詞性を中心に―」『時空と認知の言語学』II：49-58。(言語文化共同研究プロジェクト 2012、大阪大学大学院言語文化研究科)。
- 春木仁孝 (2017)：「直喩的な日本語・隠喩的な日本語」『時空と認知の言語学』VI：31-40。(言語文化共同研究プロジェクト 2016、大阪大学大学院言語文化研究科)。
- 春木仁孝 (2020)：「現代フランス語のオノマトペと構文」*Correspondances コレスポンダンス* (北村孝教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集)：775-787。朝日出版社。
- Enckell, P. et P. Rézeau (2003), *Dictionnaire des onomatopées*. 584p. Paris, PUF.

<sup>14</sup> *catimini* をギリシア語と関係づける説もあるが、ここでは取らない。なお、本稿で取り上げた表現の語源や起源については *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction d'Alain Rey(2010), Paris, Le Robert.を中心に、適宜いくつかの辞書を参考にした。

執筆者紹介（五十音順）

井元 秀剛（いもと ひでたけ）	大阪大学大学院言語文化研究科教授
高橋 克欣（たかはし かつよし）	大阪大学大学院言語文化研究科准教授
瀧田 恵巳（たきた えみ）	大阪大学大学院言語文化研究科教授
田村 幸誠（たむら ゆきしげ）	大阪大学大学院言語文化研究科准教授
春木 仁孝（はるき よしたか）	大阪大学大学院言語文化研究科名誉教授

言語文化共同研究プロジェクト 2020

時空と認知の言語学Ⅹ

2021年5月31日発行

編集発行者 大阪大学大学院言語文化研究科

